精かんなきみから
精かんな　かれへ**贈りものはジャガー**

胸から出す、ノックする、書く………
三菱ボールペン《ジャガー》は、すべてに
スキがありません。
スマートなデザイン、軽快なキャップ
スライド、ムラのない書き味《ジャガー》
は、行動的な若いあなたに、ぴったりです

精悍なヤツ——

ジャガー

三菱ボールペン

¥2000・¥1000・¥800・¥500

ハンドボール「第61号目次」

昭和44年1・2月号

表紙写真　全日本選抜で健斗した菊池農高（於東京体育館）

ニコンF　50㎜/2
5.6/60　Tri X
（ASA1000に増感）

時評

中学教材採用の報に接して

『中学校学習指導要領・案』(43年12月17日文部省発表)にハンドボールが採用された球界がかかえる多くの課題のなかで、これは〝悲願〟ともいうべきものであった。

ハンドボールは、その教育的、体育的効果に期待がかけられて大正時代に伝来された種目である。日本ハンドボール協会の設立は昭和13年2月だが、大正末期、昭和初期は社会体育として普及されていた。

教材としての採用は、若い世代にハンドボールを親しんでもらう機会、理解してもらう機会が生まれたといえる。大きな前進を企ろうとする斯界にとつて、これは百万の味方を得たに等しい。

地方組織の関係者は、チームの増加、競技人口の伸展を果すには「中学校学習指導要領」への採用以外にない、とさえ云い切っていたものであり、ここ数年間、日本協会の重点施策の一つとして、ハンで捺したようにこの問題は加えられていたのである。

日本ハンドボール界の競技力向上を果すには〝底辺の増大〟が不可欠である。

現在、全国の中学校でハンドボール部を常置しているのは4パーセントに満たぬ(昭和42年スポーツ人口調査による)

中学校体育として実現されれば年を追ってこの数字は高められていくであろう。

日本ハンドボール界も三十の年輪を重ね、その頂点のレベルは国際的に充分通用するまでに成長している。

しかし、充実したとはいえ何か他の競技界に比べて、ひ弱な感じは否めないし、一般への浸透も未だしの感である。

これは一にも、二にも底辺の不安に原因している。今回の報は、ハンドボールの教育的効果が再認識された喜びとともにこの面での拡充にも大きな希望を与えよう。

クラブに活きる道を

最近、球界関係者に会うと、かならずといってよいほど相談をもちかけられるのがクラブチームの活きる道についてである。

新興ともいうべき実業団、教員界のめざましい伸展ぶりにクラブ界が圧迫され〝閉店〟の看板を出しはじめたクラブチームがめだってきたのだ。

この傾向は、女子に著しく、かつては全国で二百近いといわれたOGクラブが、今年度日本協会登録ではついに58チームに減ってしまった。

男子にもその波はヒタヒタと打ち寄せているようで、チーム登録料が財源の主要部分を占めている斯界にとつて、これは深刻な問題であり、関係者が真けんに取り組みはじめたのもムリからぬことだ。

ある地方協会役員は『強い実業団が生まれることは好ましいが、そのために多くのクラブが活動を休止してしまうのではなんにもならぬ。クラブにはげみを与えるような企画を打ち出さなければ、組織の維持が難しくなろう』といっている。

日本協会ではクラブの所遇についてアイデアをねっているようだが、いまのところ具体的な企画は浮かんでいない。

クラブの実情からみても、いきなり全国規模の大会を開くのは適策ではあるまい。

小さな単位、小さなタネをだいじに育てて大きな実へ、大きな花へと導いていくべきである。第一段階で県のクラブ(OB)大会、第二段階でブロック大会、第三段階で東日本・西日本両大会、最終目標として東西両代表による全日本クラブチャンピオン決定戦というステップはどうだろうか。

底辺拡大とは、年小者層を対象にするばかりではなく、ハンドボール人の〝定年〟を1年でも長く延ばすように努めることも含まれているのである。(S・S)

木野（前回代表）ら精鋭40人を発表

来年の世界男子選手権第一次候補

日本協会は12月23日東京で、第7回世界男子7人制選手権（昭和45年2月28日〜3月15日・フランス）に備えて、全日本代表第一次候補選手40名の名簿を発表した。

発表された第一次候補選手（GK6、FP34名）は別表のとおりだが、これは、新設された選手強化対策本部が、昨年11月中旬から12月上旬にかけて全国の地方組織と加盟団体に対して推せんを依頼（本誌既報）、同本部に届け出られた98人のなかから、荒川本部長以下同本部男子指導委員が選こうを行って決めたもので12月22日の常務理事会で承認をうけたのち発表された。

今回の選こうは、対ヨーロッパ各国ということで、長身選手が重点的、優先的に選ばれ、さらに、過去の国際経験、今年度の全国大会の実績などが対象とされた。40人の平均身長は一七七センチと史上最高。（体重は70K）

また、今回は銘打たれていないが、この候補選手のなかから当然一九七二年（昭47）のミュンヘンオリンピックの主力が輩出されるという考りよから20才前後の若手が積極的にリストアップされている。

候補選手の内訳けは学生23、社会人17。チーム別では全日本二冠の全立教から7人（OB2、現役5）が選ばれたほか大崎電気8人日体大6人が主なところである。

第7回　世界男子7人制選手権 全日本代表第1次候補選手名簿

	氏名	（出身校—現所属）	年令	身長
▽GK（6名）				
④⑤	福本　弘	芝浦工大—大崎電気	30才	173cm
	下里　敏彦	熊本市商—大崎電気	22	184
	川口　宗一郎	寝屋川高—立教大	21	178
	本田　洋	堺工—日体大	21	178
⑤⑥	尾形　讓	立教大—三景	24	177
	綿貫　敏雄	明星高—早稲田大	21	175
▽FP（34名）				
⑥	木野　実	立教大—全立教	23	180
⑥	北村　文雄	立教大—全立教	23	172
	野田　清	愛知工—立教大	22	169
	東　一敏	熊本市商—立教大	23	179
	小野口　正二郎	鎌倉学園—立教大	22	178
	有永　修二	西宮東高—立教大	20	186
⑤	井上　素行	芝浦工大—大崎電気	27	170
	西村　功	法政大—大崎電気	26	167
⑥	近藤　信行	芝浦工大—大崎電気	24	170
⑥	飯田　誠行	同志社大—大崎電気	23	188
⑥	近森　克彦	芝浦工大—大崎電気	23	181
④⑤	竹野　奉昭	日体大—大崎電気	32	174
	早川　清孝	博多工—日体大	22	179
	井上　亮一	明石高—日体大	21	174
	藤中　憲二	岩国工—日体大	21	177
	谷藤　勝美	盛岡商—日体大	21	170
	斎藤　光男	富岡高—日体大	20	181
	森　宗春	桜台高—芝浦工大	19	181
	新実　俊夫	桜台高—芝浦工大	19	179
	明石　雄次	徳山高—芝浦工大	19	176
	森山　清	済々黌高—中央大	21	179
	植木　一久	関東学院—中央大	20	180
	松浦　末義	桜台高—同志社大	22	170
	中井　武三	伏見工—同志社大	19	179
	市原　則之	広島商大—全広島	27	182
⑥	江名　英彦	立教大—三景	25	177
⑥	北井　晴次	東京教大—埼玉教員	25	175
	加藤　久勝	新居浜工—住友化学	24	176
⑥	飯端　寿昭	関学—三国丘ク	23	184
	福井　稔	日体大—イーグルス	22	172
	平岡　秀雄	塔南高—東京教大	22	183
	大山　高英	横浜南高—法政大	21	182
	鈴木　幸男	明星高—早稲田大	20	178
	藤井　良彦	清水東高—明治大	20	170

・○内数字は世界選手権回数例　④は第4回世界選手権
・右の数字は身長・（　）内左は出身校，右は現所属

年令別では竹野（大崎電気）の32才を最年長に30代が2人、29〜25才が5人、24〜20才が29人、19才が4人となっている（平均年令は22・5才）

世界選手権の出場経験者は別表マークの通り12人、このうち前回（昭41、スウェーデン）出場者は木野（全立教）ら9人である。

これら第一次候補選手は1月21日から26日まで東京代々木の日本青少年総合センター（旧オリンピック選手村）で合宿を行い、体力測定、基本練習、応用練習などをつんだ（詳細次号）。

選手強化対策本部ではこの合宿の結果で、候補選手を半数近くにしぼり「第二次候補選手」として2月中に発表する意向である。なお役員団については白紙。

【解説】10月の選手強化対策本部員の決定につづいて、ナショナルチームの第一次候補選手が発表された。日本協会の要請で、本部員だけの〃目〃にたよらず全国関係者から推せんされた選手の中からさらに多彩なデータによってにつめるという方法を経ているだけに順当な顔ぶれといってよいだろう。全国からの推せんは、98人という小人数だった。予想の三分の一だ。これは推せん者（地方協会、加盟団体）が主旨を理解し、名実ともにナショナルチームの候補選手として推すにふさわしい選手に規制したためであろう。

荒川本部長も『こちらが予想していた選手がほとんど出そろった推せん者のまじめな態度と協力に感謝したい』といっている。

さて、強対本部では手まわしよく、1月21日から5日間の予定で最初の強化合宿を実行に移したが、2月中には第二次候補選手の発表を行うという。

消息筋は、第二次候補は15〜20人といっており、実質的にはこれが最終候補—つまり代表選手となる公算が強い。この選にもれた選手は解散せずに、いわばナショナルBというような形で存続し、ずいじナショナルチームとの間で、交換していきたいという意向ももらされている。

荒川本部長は12月23日の記者会見で個人的な意見として、4月以降は機を見て代表チームの全国縦断試合を行いたいともらしており春までに全日本代表が決まることはまず間違いなさそうだ。

今回発表の40人は・技・心・体とも国内最上位にランクされる選手ばかりである。

長身選手と、技巧派のかみあわせなどこれを半数近くにしぼるのは難事と思われるが、強対本部の勇気ある決断を期待したい。

全国関係者、ファンもミュンヘンへつながるこの全日本候補選手をあらゆる面で支援協力して欲しい。特に日本協会と強対本部の協調ある進行は、目的の完遂に不可欠である。（杉）

中学校学習指導要領案に復活

文部省は12月17日、新しい「中学校学習指導要領・案」を発表した。これは、中学校の教育内容を昭和47年度から全面的に改めるためのもので、昭和33年以来の改定である。

「保健体育」部門でその復活が各方面から期待されていたハンドボールは、バスケットボール・サッカー・バレボールとともに球技種目として採用された。

ハンドボールの中学校学習指導要領への復活は、球界あげての宿願であり、今回の改定の結果は大いに満足なものといえるだろう。

この指導要領案は、今春3月に告示され、そのあと全国関係者（教師）に対する伝達講習会、新教科書の検定などが行われる予定。

なお「保健体育」は体育・保健の二分野にわけられ「旺盛な気力と体力の向上」が目標として強調されている。

発表された体育分野のうち関係事項は別掲の通りである。

× × ×

日本ハンドボール界にとって「中学校学習指導要領」への復活は「世界への雄飛」とならぶ大課題であった。

前回の改定で、ハンドボールの名が指導要領から消えたことは、日本ハンドボール界の発展のために大きなマイナスとなり、特に現場指導者に与えた打撃は大きかった。

ハンドボールの体育的効果は、欧州諸国の例をひくまでもなく、わが国にこの競技が伝えられ短時日に普及したのも、そうした点の特色が認められたにほかならない。それが十余年間も削られていたのだ。

日本協会では数年前から的場益雄氏を対策責任者に推して、関係筋への働きかけやデーターの整備などを行っていた。

教材としての採用問題だけに、的場氏たちの苦労も多く、しかもその成果が、そのつど形にあらわれるというものではないだけに忍耐のいる仕事でもあった。

特に、審議の過程が、文教関係者のベールの向こう側で進められるため、タイムリーな対策を打ち出すことには骨がおれたようだ。

それだけに、今回の発表は、対策委の地味な努力が実ったものとして、多いにその労に感謝したいところで、復活が決まったとはいえ、あくまで中学校体育の教材としてのものであり、それをそのまま日本ハンドボール界の発展に結びつけるのは早計である。

現場指導者にハリが出たこととハンドボール競技への理解者が増大することはたしかだろうが、撒かれたタネを、どう育てるかは、やはり日本ハンドボール協会の姿勢にかけられている。

中学校でハンドボールを教わった生徒、教える指導者に誇りがもてるような日本ハンドボール界に前進することが、今回の改定を最大限に活かす道なのである（S）

中学校学習指導要領案「保健体育」体育分野抜すい

〔体育分野・内容〕

A 体操（略）
B 器械運動（略）
C 陸上競技（略）
D 水泳（略）
E 格技（男子）（略）
F 球技

(1) 次の運動によって球技の技能を養い、規則を守り、攻防のしかたを考えてゲームが出来るようにする。

▽バスケットボール（略）
▽ハンドボール
ア 個人的技能＝パス、ドリブル、シュート、ガーディング
イ 集団的技能
（ア）速攻
（イ）カットインプレー
（ウ）ポストプレー
（エ）対人防禦
（オ）地域防禦
ウ ゲーム＝既習の技能を利用したゲーム
▽バレーボール（略）
▽サッカー（男子）（略）

G ダンス（女子）（略）
H 体育に関する知識（略）

〔体育分野・内容の取り扱い〕

（1）～（5）いずれも略
（6）内容のF（球技＝編集部注）については、次の事項について配慮するものとする。
ア、バスケットボールとハンドボールについては、いずれか一つを選んで指導すること。
イ、サッカーについては運動場が狭く、じゅうぶんな指導ができない場合は、他の球技種目に代えることができること
ウ、第3学年においては、示された運動種目に代えてソフトボール、テニス、卓球、バドミントンを指導することができること
エ、オ、カ いずれも略
（7）～（12）いずれも略

〔以上は発表された中学校学習指導要領案一三一頁～一四三頁から抜すい〕

訂正

本誌60号2頁最下段の記事を次のように訂正致します。

来年4月から5月にかけて、できれば全日本ナショナルチーム、それができない場合には、大崎電気チームをルーマニアへ遠征させる計画のあることを明らかにした

御迷惑をかけた関係者のみなさまに謹んでお詫びいたします。

男…9連勝有望な大崎
女…大洋デパート中心に激戦

横浜で全日本実業団選手権

第9回全日本実業団選手権は今年度最後の全国大会として2月8日から12日までの5日間、横浜市の文化体育館を主会場に行われる。

男子は30チームによるトーナメント、女子は8チームが〝全日本選抜方式〟により優勝を争う。組み合せ（別掲）を見ながら大会を展望してみた。

（編集部）

【男子】 国体優勝、全日本2位、第1回以来35戦無敗という大崎電気（埼玉）は、面目にかけても負けられまい。

竹野、井上、西村らの巧者が相かわらず元気だし近藤、近森、飯田旗野、谷口、太田らの若手もそれぞれの持ち味をよく発揮しているGK福本、下里を基点とした速攻は、社会人球界では抜群である。

大崎を追うのは常盤工業（岐阜）―三菱レ大竹（広島）の勝者、住友化学菊本（愛媛）、三景（東京）だろう。

常盤は山田の加入で攻撃力に厚味ができ高橋、中島、吉金、GK渡辺らでのスキのない布陣だ。

三菱レ大竹は実業団球界の最古参。木下、沖重の両ベテランが健在で田中、兼森、相原らの若さと巧く力をあわせている。

住化菊本（愛媛）は。福井国体ではエース加藤、GK季原の負傷から4位に留ったが、両選手とも復調し松井を軸に長嶺、白石、落海、神代、北山らのコンビネーションプレーは強力である。

三景は江名、竹村、榊を軸に新人の高梨、内藤、山原が定評どおりの力を示し、トップチームとしての位置を安定させて来ている。尾形がGKに再転向したため、彼のユニークな左腕攻撃は消えたが守りの面は引きしまった。

4者とも「大崎を倒すこと」が目標で、年々その差をつめてはいるが、いつも大崎に一歩をゆずるのは試合展開力と構成力だ。この点では三景がいちばん期待できる以下住化、常盤、三菱の順とみるのだが……。

後続グループで有望とみられるのは武田薬品（山口）、富士レジン（兵庫）、日進商会（神奈川）、自衛隊勝田（東京）、丸善石油（和歌山）、日本鋼管福山（広島）、富士製鉄名古屋（愛知）、川崎車輛（兵庫）あたり。

特に正本、米沢らを持つ日進商会、体力とまとまりを誇る自衛隊勝田は上位にとって油断のならぬ存在であろう。

千代田印刷機製造（東京）と宗形製作所（大阪）は、この大会をカムバックのステップに狙っておりその試合ぶりが注目される。

三菱鉛筆地元の利活かすか

【女子】 今シーズンの実績から決勝リーグへ進むのは田村紡（三重）三菱鉛筆（神奈川）、大洋デパート（熊本）、大崎電気（埼玉）の4強とみるのが順当だ。

この中から全勝で抜け出るのはなみたいていのことではないが、三冠王を狙う大洋デパートを最右翼に推したい。新保の退社は痛いが垂水、渡辺、枝尾、GK小原らの布陣は安定している。しかし追う三者との実力差は紙一重だ。12月の全日本選抜では、大崎が早川鈴木と中野の成長などもあり幸運をつかんだがその好調を持続していれば連続優勝も望める。三菱は全日本選抜では、大崎、田村紡にいずれも5―6の惜敗、内容的にはむしろ押し勝っていた。蓮見、落合、江川に加えて姫野、小田島が伸びた。今回は地元でもあり、初優勝のチャンスである。

昨年の4冠王田村紡は「世界選手権」で気の毒にも1年間ふりまわされてしまった。迫力がなくなり今シーズンは無冠だが、最後のこの大会に持ち前のファイトを存分に発揮して欲しい。

予選リーグにおける大洋―大崎田村紡―三菱戦の勝者同士で〝決勝〟を演じる公算が強いが、星のつぶしあいから同率といった大混戦も充分考えられる。

その他のチームではブラザー工業（愛知）と東京重機（東京）が4強の一角を狙っており、それだけの力も事実備えている。

初出場の大洋紡（岐阜）、宗形製作所（福島）は飛躍を期す来年のための偵察戦。今回は斗志でどこまで、といったところだろう。

【男子】

- 大崎電気（埼玉）
- 本田技研（三重）
- 武田薬品光（山口）
- 日本鋼管京浜（神奈川）
- 日立製作所（茨城）
- 京都信用金庫（京都）
- 富士レジン（兵庫）

- 神戸製鋼（兵庫）
- 大阪ガス（大阪）
- 大同製鋼（愛知）
- 日進商会（神奈川）
- 三菱レイヨン（広島）
- 金沢市役所（石川）
- 安田生命（東京）
- 常盤工業（岐阜）

- 住友化学菊本（愛媛）
- 自衛隊勝田（茨城）
- タヨシ産業（愛知）
- 北陸電力（福井）
- セントラル自動車（神奈川）
- 丸善石油（和歌山）
- 千代田印刷機製造（東京）
- 日本鋼管福山（広島）

- 川崎車輛（兵庫）
- 日本発条（神奈川）
- 富士製鉄名古屋（愛知）
- 宗形製作所（大阪）
- 日本原子力研究所（茨城）
- 三菱油化（三重）
- 三景（東京）

【女子（予戦リーグ組合せ）】

△A組
- 田村紡（三　重）
- 三菱鉛筆（神奈川）
- 大洋紡（岐　阜）
- 東京重機（東　京）

△B組
- 大洋デパート（熊本）
- 大崎電気（埼玉）
- ブラザー工業（愛知）
- 宗形製作所（福島）

各組上位2チームが決勝リーグへ進みA①―B②・B①―A②、A②―B②・A①―B①の日程で試合を行なう。

4月から複審制採用

—12月審判部合同会議で決定—

すでに周知のとおり、来年度から〝複審制〟が国際的に正式に採用されることになり、我が国でもこれと期を一にして、これを採用すべく審判部が主になって検討を行ない、44年4月から実施を決めた。

審判部では、去る12月21日に審判部合同会議を開き、規則変更の細部とIHFからもたらされた〝複審制の規範〟に関して検討を重ねた。

審判部では、IHFからの規則の変更の通知と条文を受けるとすぐにそれについて検討をはじめた。規則研究委員会が主となり、数度にわたる委員会で討議を重ね不明な点はIHF競技委員会に問い合せるなどして、明らかにし、競技規則の1の2、3の1、7、17の1、4、5、12、14の一部変更、17の16、17の削除、17の18を17の16とし、一部変更することを国際ルールにしたがって、競技規則の変更を行なうようにした。

またIHF競技委員会より送られてきた複審制を行なう際の細部にわたっての規則ともいうべき〝複審制の規範〟を検討し、これも不明な点の問い合せをIHFに行ない、また滞欧中の安藤審判部長にも、ヨーロッパでの実情を聞くなどして検討を重ねてきた。

この規則研究委員会で出した案をもとにして、ブロック審判部長審判審査委員、規則研究委員など審判部員が12月21日（土）に日本体育協会に集り、討議を重ね、疑問点、解釈について統一見解がまとめられた。

規則研究委員会においても、審判部合同会議においても、もっとも、問題となったのは、〝複審制の規範〟についてであった。実験的には各地で試みられてはいたがこれまで一人のレフェリーによって行なわれていた試合を二人のレフェリーが笛を吹くという全く新しい事態だけに、実際上、競技でおこりうるであろう種々の事態に対しどのように対処するか、また実際どのようにして複審制を施行していくかに問題がしぼられていた。

実験的に行なわれた、東京・大阪などの例では、比較的スムーズにできることが、経験のある部員から述べられ、〝複審制の規範〟について具体的な検討に入った。

これは4つの部分からなっている。

第一はどのような条件のもとに二人のレフェリーを選ぶかの項であり、ここでは、良く知りあっているレフェリーで三・四人のレフェリーの小グループを作るように推めている。このグループの中から、競技解釈の同じもの、似たような性格、運動能力をもっているもの二人をコンビにして笛を吹くようにすることといっている。

二人のレフェリーは神ではないのだから、全く同じ笛というのは期待すべくもないが、少しでもそれに近づけようとするのが第一の条項である。

第二に共同の任務について述べられ、二人は互いに対等の権利をもっていることなどが述べられている。ハンドボールの複審は、どちらも主審であり、副審はいないということである。これまでレフェリーがやっていたことは、二人のレフェリーのどちらもやらなければいけないのである。

第三に任務の分担があり、ゴールの側に立ち、従来のゴールジャッジのやっていたことと、レフェリーのやっていたことを併せ行なうゴールレフェリー、従来のレフェリーが笛を吹いていた位置で笛を吹くセンターレフェリーの役割が定められている。ゴールレフェリーとセンターレフェリーは、チームの攻守によって、場所が変るだけで、二人のレフェリーは試合中二人ともゴールレフェリー、センターレフェリーと位置をかえることになる。この役割の分担のしかたは、現在の西ドイツの状況とはやや異っているようである。

第四に二人のレフェリーが実際に笛を吹く際におこるであろう種々の問題に対し、処理できるように配慮された基本的なルールが述べられている。

これらは、諸国における実施による結果、得られた種々の意見をIHF競技委員会が集約し、IHF競技委員会自身による国際審判員講習会における実技指導などを通して、練りあげられた結果できたものであるので、かなり実情に即した規範になっているものと考えられる。

競技規則の変更、および複審制に関する規範は別紙にして本誌にはさみこんである。

また実施はなるべく早くとの声が各方面にあり、実業団連盟からの申し入れもあるので、年次途中では規則は変更しないこととなってはいるが、今回は特例として二月に横浜で行なわれる第8回全日本実業団選手権から複審制を採用することにして、改めて審判員の人選をすすめることになった。二人コンビで審判を揃えることになるので互に知りあっていなければならないなどの諸条件があり、困難なことであろうが、前向きに進めることにした。

また、各地方々では、なるべく複審制で行なうことが望ましいが、現在公認審判員の数が必ずしも、十分でない現状に鑑み、例外的には従来通りでもよいことにすることとした。全日本およびそれにつながる大会はもちろん複審制が採用されることになるのはいうまでもない。

以上のように審判部では、明年度から複審制を採用することにし一月中に各ブロックで伝達講習をすすめることになった。また中央講習会も予定されている。複審制が良いスタートをきるよう関係者の努力を願う。

（F）

交代ゴールキーパーの背番号は12

—競技規則の変更補遺—

競技規則12頁（3）の（7）交代のゴールキーパーは№12をつける。

46頁（17）の（1）競技は2名のレフェリーによって管理され、このレフェリーを1名の記録員、1名のタイムキーパーが補佐する。

世界選手権(明春)も 初の複審制

滞欧中の日本協会馬場太郎氏はこのほどフランス協会理事長ピカール氏と会い、来年の第7回世界男子7人制選手権について話しあい、次のように伝えてきた。

同大会の会期は来年(昭45)2月28日〜3月15日までで、会場はパリにこの大会のために建設される予定の体育館が予算の関係で承認されなかったため準決勝リーグ以後はブサンソン、グルノーブル、ボルドー、オルレアン、リヨンなどで行うよう検討中だという。

予選(準決勝)リーグはカンなど北西部、ミュルーブなど東部、レンヌなど西部、ソールーズなど南西部の4地域に分かれ、コートはいずれもIHF規定にのっとり40M×20M、審判は「複審制」である。

出場16ケ国をまず4組に分ける本大会の抽せんは、規約どおり3ケ月前の予定だが、チェコ事件以降、ワルシャワ条約加盟国との交流を好まぬ空気が欧州各国間にあって、欧州予選が進行せず、主管国として困惑の表情を浮かべているような状態だ。

韓国高校、今夏来日か

日本体育協会では12月18日理事会を開き、今夏8月10日ごろから4日間(予定)東京で第2回日韓高校スポーツ交歓競技会を開くことに決めた。

競技はハンドボール、陸上、バスケットボールなど昨夏ソウルで行われた第1回と同じ7種目だが韓国側は、このほかの競技を二、三希望して来ており、この点について今後折しょうを行なう。

場合によっては競技種目の変更がありそうだ。

なお、ハンドボールは、昨夏、全日本高校選手権優勝校の下関中央工(山口)が訪韓して2試合(1勝1敗)を行っている。

今夏、東京で交流されれば、ハンドボール界にとっては4度目の日韓高校交歓となる。

ルーマニア安定した攻守

ブカレスト国際リーグが11月末ブカレスト(ルーマニア)に5ケ国の代表を集めて開かれ、地元ルーマニアがユーゴに引き分けたほかは安定した攻守で連勝、優勝した。

なお、ソビエトだけが単独チーム、そのほかの4ケ国はナショナルまたはそれに準じた選抜軍。ルーマニアはナショナルチームのほか若手の有望新人で固めたチームが特別出場、ハンガリー・スペインを破って気を吐いた。

ユーゴ	27−18	スペイン
ユーゴ	14−12	ハンガリー
ルーマニア	28−13	スペイン
ルーマニア	17−11	ハンガリー
ゲオルジェ(ソビエト)	22−21	スペイン
ルーマニア	28−20	ゲオルジェ
スペイン	19−15	ハンガリー
ユーゴ	20(分)20	ゲオルジェ
ハンガリー	26−18	ゲオルジェ
ルーマニア	20(分)20	ユーゴ

【順位】①ルーマニア3勝1分②ユーゴ2勝2分③ゲオルジェ(ソビエト)1勝2敗1分④ハンガリー1勝3敗(得失点差−4)⑤スペイン1勝3敗(−21)

激しい正選手争い

来年の世界選手権のホスト国フランスでは、大会の開催が決まったと同時に強力な指導体制をつくりあげ、さらに昨年は有力選手による国際試合を数多く行うなど活溌な強化策を採っていたが、今シーズンは開幕早々に35名(GK5 FP30)のナショナルプレヤーを発表し、対外試合を進める一方、これらの選手による対抗戦を毎月1回行って、レギュラー争いを激しく演じさせている。

この試合は35名をフランスの国旗にちなんだ「赤軍」「白軍」「青軍」の3チームに分けリーグ戦を行うもので毎回その編成を変えている。ファンはこの国最高プレイヤーによる月例定期戦を「三色対抗」とよんで毎回各会場をふくれあがらせているようだ。

少女用のルール スペインで決める

女子球界の立ちおくれているスペイン協会では、このほど普及促進の第一歩として、年少者(少女)を対象の特別ルールを決め、可愛いいさしえ入りのきれいな解説パンフレット(ルールブック)を作って積極的な動きをはじめることになった。

このルールは、競技そのものの進行はまったく一般と同じだが、少女の体力を考えてコートなどを縮少しているのが特色である。

たとえばコートの大きさは最大16×32M、ゴールエリアラインは8M、フリースローラインは5M、したがってペナルティは6Mスローだ。ゴールは一・八(高)×二・七(巾)。ボールは外周48〜50cm重さ三百〜三百五十g。試合時間は15分ハーフと決めている。

ヒ67 9111

ハンドボール選手の体力測定実施報告 (1)

技術資料調査専門委員会

技術資料調査委員会に於て現在の日本ハンドボール競技実施者についてどの位の体力があり又機能的には他競技と比較してどのような状態にあるかということが問題となりこの調査を実施したわけである。そして今後のハンドボール技術向上のための基礎資料となりうればとの見解も、もっているわけである。

技術部内には現在迄このような資料が全然なく全く雲を掴むような状態であったことは事実である

先輩諸氏が個々に行った調査等は何れも個々のものであり、それが個々のチームにのみ対象として行われて来たものであって協会としてはその資料の収集は出来なかった。しかしながら今度の調査資料は不備な所があるにせよ又ハンドボール人口から見ると必らずしも多くはないがある程度の日本ハンドボールの内容が知れるのではないかとの考えもある訳である。夫々個々のチームについて参考になれば幸である。

尚この資料の提出にあたって用務多忙のところ測定を行われたチームの方々には万腔の感謝の意を表すると共に今後共よろしく御支援下さいますことをお願い致します。

さて調査はどのようにして行われたかというと各都道府県の、一般高校・中学男女そして大学チームのある所は男女チームと夫々の単位の上位チームということを第一目標として行ったのである。

資料提出チームは全部で九〇チームであり内訳は左の通りである。

一般男子　六チーム
一般女子　五チーム
大学男子　二〇チーム
大学女子　四チーム
高校男子　二一チーム
高校女子　二六チーム
中学男子　五チーム
中学女子　四チーム

尚測定種目は、

A、形態的種目
身長・体重・胸囲・上腕囲・前腕囲・大腿囲・下腿囲、以上七項目

B、機能的種目
イ、筋力＝握力・背筋力・腕立伏臥・腕屈伸
ロ、パワー＝サージェントジャンプ・遠投・立三回跳
ハ、敏捷性＝九メートル三往復走、二〇メートル疾走ローリング
ニ、持久性＝ハーバードステップ
ホ、柔軟性＝体前屈・上体そらし　以上一二項目

以上であるが今回の紙面掲載はAの形態的測定種目のみであってBの機能的測定種目は次号より掲載することにする。

第一表

体育測定資料提出チーム

一般男子
自衛隊勝田施設学校(茨城)、北陸電力株式会社福井支店(福井)、住友化学工業株式会社菊本製造所(愛媛)、富士製鉄株式会社名古屋(愛知)、武田薬品株式会社光工場(山口)、株式会社小松製作所粟津工場(石川)

一般女子
大崎電気工業株式会社(埼玉)、田村紡績株式会社(三重)、大洋デパート(熊本)、三菱鉛筆株式会社(東京)、ブラザー工業株式会社(愛知)

大学男子
立教大学、西南学院大学、桃山学院大学、関西大学、岡山大学、北海道大学、近大呉工学部、東北学院大学、芝浦工業大学、本州大学、広島商科大学、大阪経済大学日本体育大学、仙台大学、同志社大学
松山商科大学、名城大学、中京大学、東京教育大学

大学女子
東京女子体育大学、中京大学、東京学芸大学、東京教育大学

高校男子
函館東高校(北海道)、大石田高校(山形)、塩山商業高校(山梨)、横浜市立南高校(神奈川)、大阪府立堺工業高校(大阪)、中京高校(愛知)、柏崎工業高校(新潟)、松山北高校(愛媛)、足利工業高校(栃木)、岡崎北高校(愛知)、八幡工業高校(滋賀)、鯵ヶ沢高校(青森)、那賀高校(和歌山)、佐原高校(千葉)、倉敷高校(岡山)添上高校(奈良)、国学院大学附属栃木高校(栃木)、松江工業高校(島根)、安島崎工業高校(大分)、上田高校(長野)、石川県立工業高校(石川)

高校女子
小平高校(東京)、笠間高校(茨城)、秋田和洋女高校(秋田)、十津川高校(奈良)、栃木女子高校(栃木)、新居浜市立商業高校(愛媛)、明善高校(福岡)、四日市立育村子高校(三重)、勝浦女子高校(徳島)、高岡女子高校(富山)、松江市立女子高校(島根)、岡崎真備高校(愛知)、岡崎北高校(愛知)、竹田女子高校(山形)水海道二高校(茨城)、八幡商業高校(滋賀)、都城泉ヶ丘高校(宮崎)、三本松高校(香川)、高崎市立女子高校(群馬)、住吉学園高校(大阪)、室蘭商業高校(北海道)、涌谷高校(宮城)、菊池農業高校(熊本)、加納高校(岐阜)、玖珠農業高校(大分)、京都女子高校(京都)

中学男子
結城中学校(茨城県結城市立)、三谷中学校(愛知県蒲郡市立)、南部中学校(富山県氷見市立)、出水中学校(熊本県熊本市立)、桜田中学校(名古屋市立)

中学女子
三谷中学校(愛知県蒲郡市立)、結城中学校(茨城県結城市立)、桜田中学校(名古屋市立)

調査の目的　選手強化策の重要な一つとして科学を利用し効果をあげていることは、東京オリンピック以来各競技種目で明瞭である

われわれのねらいは、トレーニングまたは技術の向上に役立てる科学的研究の第一歩として、形態機能面の測定調査を行ない比較検討したのである。

1、体力の現状を把握する。
2、他種目の選手との比較により形態的、機能的特徴を理解する。
3、体力の推移とハンドボール選手の特有な体力とはいかなるものであるか。(調査を継続することにより)
4、長所短所を認識して、向上

発展に資する。
　スポーツにはそれぞれ種目別に特徴があり、その種目別によって効果的に遂行するには、それぞれに必要な身体的、心理的な性能を備えることが必要であってその効果的な遂行の可能性をスポーツ適性とよばれているわけである。具体的に言うならば特定のトレーニングをしたり、経験を重ねたりする以前に潜在的に体格、体型、感覚器の機能、知覚機能及び性格特性などが存在している状態または傾向である。主体的立場から適性にあった種目を行なうことによって楽しくもでき、効果もあげられると同時に技術面においても向上するのは当然である。技術面で飛躍的な向上をはかるためには優秀な素質ある選手をえらび、有効適切なトレーニング方法によって強化すれば目的を達成されることはいうまでもない。
　ハンドボール競技技能は複雑な内容を有してはいるが、ハンドボールの適性にある選手をある程度予測し、評価できる妥当なテストを作成することが必要である。もちろん充分なものを作成することを望むことは困難であるが、完全に妥当していなくとも、形態とスキル・テストの作成は選手を選考するさいの客観的基準としての意味をもつとともに、技能習熟の程度を知ることによって練習計画の作成のさいの参考資料にもなる。しかも選手自身にとって練習の具体的目標が明らかになり、意欲的に練習するきっかけをつくるなど多くの面で役立つのである。
　例えば運動種目によって使う筋肉の種類はそれぞれ異なるが、その筋力が特に劣っているかを発見することは、トレーニング処方にさいし重要な問題である。また痩身者のプレーヤーに体力増加をはかるために、トレーニングによるカロリーの消費を上回る豊富なカロリーを与え、筋肉トレーニングによって筋力の増強をはかるということが理想である。
　ヨーロッパ各国、アメリカ、ソ連などでは体育大学、体育研究所、スポーツ科学研究所の諸設備が整っていて選手や学生の体力管理体制が実に徹底しているのと合理的なトレーニングを処方しているのである。
　本号では形態面を取扱い、機能面については次号において検討する予定である。
　形態は運動練習によって短期間に極端に効果を示されないところから軽視される傾向もあるが、運動種目によっては形態がその運動性を決定する場合もあり、充分な運動適性の判定には必要条件とな

第２表

	中学男子 ハンドボール X	SD	全国平均	中学女子 ハンドボール X	SD	全国平均	高校男子 ハンドボール X	SD	全国平均	高校女子 ハンドボール X	SD	全国平均
身長 cm	163.0	±8.0	152.9	154.2	±5.1	150.6	168.1	±5.5	166.0	157.1	±4.4	155.1
体重 kg	50.4	±8.2	42.9	46.9	±6.6	43.2	57.9	±5.3	55.7	53.5	±4.6	50.3
胸囲 cm	78.7	±5.8	74.3	76.7	±4.3	74.8	85.9	±3.8	83.9	82.3	±5.9	80.5
上腕囲 cm 右	23.3	±2.6	—	22.3	±1.9	—	25.9	±1.3	—	25.0	±3.8	—
上腕囲 cm 左	23.1	±2.7	—	21.9	±1.7	—	24.9	±1.8	—	24.4	±2.1	—
前腕囲 cm 右	23.8	±2.7	—	21.6	±1.2	—	25.6	±2.0	—	23.1	±1.4	—
前腕囲 cm 左	23.3	±2.7	—	21.3	±1.2	—	24.9	±1.8	—	22.6	±1.4	—
大腿囲 cm 右	47.0	±4.6	—	49.0	±3.9	—	51.1	±2.7	—	52.2	±3.3	—
大腿囲 cm 左	46.8	±4.4	—	49.1	±3.6	—	50.9	±3.0	—	52.3	±3.3	—
下腿囲 cm 右	34.4	±3.6	—	33.4	±2.6	—	36.1	±1.8	—	35.4	±2.1	—
下腿囲 cm 左	34.5	±3.6	—	33.6	±2.6	—	36.3	±2.1	—	37.3	±2.2	—

	大学男子 ハンドボール X	SD	全国平均	大学女子 ハンドボール X	SD	全国平均	一般男子 ハンドボール X	SD	全国平均	一般女子 ハンドボール X	SD	全国平均
身長 cm	171.3	±5.4	168.3	158.2	±4.6	155.7	169.4	±5.4	—	157.9	±5.9	—
体重 kg	63.0	±5.6	58.2	54.5	±4.8	50.7	62.5	±4.9	—	55.0	±4.6	—
胸囲 cm	90.0	±4.3	85.9	82.6	±2.9	80.4	88.8	±3.9	—	83.5	±3.0	—
上腕囲 cm 右	26.7	±2.2	—	24.7	±1.7	—	26.7	±1.9	—	25.5	±2.1	—
上腕囲 cm 左	26.2	±2.2	—	24.1	±1.5	—	26.3	±1.8	—	24.6	±2.2	—
前腕囲 cm 右	26.0	±1.6	—	23.2	±1.2	—	26.7	±1.8	—	23.4	±1.3	—
前腕囲 cm 左	25.4	±1.5	—	22.5	±1.2	—	26.2	±1.7	—	22.7	±1.2	—
大腿囲 cm 右	51.9	±2.9	—	52.8	±2.8	—	52.0	±2.9	—	53.8	±2.7	—
大腿囲 cm 左	51.9	±3.0	—	52.4	±2.6	—	51.9	±2.8	—	53.6	±2.7	—
下腿囲 cm 右	36.5	±2.3	—	36.2	±1.3	—	36.5	±2.0	—	36.3	±2.1	—
下腿囲 cm 左	36.6	±2.3	—	36.2	±1.6	—	36.7	±1.9	—	36.2	±2.0	—

るものである。
例えばバレーボール、バスケットボールの技術では敏捷性とより以上に必要なのはジャンプ力である、より高いところでボールを扱うにはより高くジャンプすることとより大きいプレイヤーを役立てることが重要で技術以前の一般的なというか、体力面からくるものである。東京オリンパックのバスケットボールの試合で、日本チームがソ連と接戦したが巨漢すなわち二一八糎のプレイヤーに敗れたといわれている。このプレイヤーは早く走れないし技術的にも優れているものではなかったが、ゴール近くでボールを持たれるとどうしようもなかったのである。外国チームとのときは、この巨漢に対して大きいプレイヤーがディフェンスをし彼の活躍を封じることができたが、日本チームのプレイヤーの中には彼に対抗できるものがなかったのである。これは技術というより明らかに形態的な勝負である。

またハンドボールでも二〇〇糎級のプレイヤーが、ポストでボールを保持し鋭角にシュートしたりジャンプシュートをしたら、ダイナミックであろうし反面驚異である。

なおこのような巨漢が三名もゴールエリア前でディフェンスしたとしたら一六〇糎台のプレイヤーはシュートのチャンスを得られないのではないか。

第3表

			中学男子		中学女子		高校男子		高校女子		大学男子		大学女子		一般男子		一般女子	
			X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD
身長 cm	右	R	166.4	±6.1	154.9	±4.9	168.8	±5.2	157.9	±4.2	171.7	±5.5	158.6	±5.9	170.9	±4.3	158.0	±7.6
		O	159.2	±8.0	153.5	±5.3	167.6	±4.8	156.5	±4.3	170.9	±4.8	159.3	±6.0	167.7	±5.5	157.7	±4.0
体重 kg		R	53.4	±6.2	47.5	±5.4	59.8	±4.9	53.0	±5.2	63.2	±5.1	55.0	±4.1	63.1	±4.7	55.0	±4.0
		O	47.1	±8.7	46.2	±7.4	57.1	±5.1	54.0	±5.0	62.5	±5.8	53.6	±5.5	61.9	±5.2	54.8	±4.9
胸囲 cm		R	80.7	±4.3	76.9	±3.5	87.4	±3.9	83.0	±3.5	90.2	±4.1	83.0	±2.8	88.9	±4.1	83.4	±2.6
		O	76.4	±6.2	76.5	±5.0	84.4	±3.8	81.6	±4.2	89.6	±4.3	81.7	±2.8	88.6	±3.7	83.5	±3.6
上腕囲 cm	右	R	24.0	±2.7	22.6	±1.6	26.1	±1.7	24.8	±2.1	26.9	±2.4	24.7	±1.8	26.8	±2.3	25.6	±2.0
		O	22.5	±2.2	22.0	±2.0	25.6	±1.9	25.1	±3.5	26.6	±2.1	24.6	±1.5	26.5	±1.7	25.4	±2.0
	左	R	24.0	±2.8	22.1	±1.4	25.7	±2.0	24.3	±2.1	26.3	±2.1	24.1	±1.4	26.5	±1.9	24.7	±2.2
		O	22.1	±2.1	22.5	±1.9	25.3	±2.0	24.8	±3.2	26.0	±2.1	24.0	±1.8	26.2	±1.5	24.5	±2.0
前腕囲 cm	右	R	24.2	±3.0	21.8	±1.1	25.6	±1.8	23.3	±1.4	26.1	±1.6	23.3	±1.1	26.9	±2.2	23.5	±1.1
		O	23.3	±2.2	21.4	±1.3	25.4	±2.0	23.0	±1.5	25.7	±1.7	22.9	±1.4	26.4	±1.4	23.2	±1.3
	左	R	23.8	±2.9	21.5	±1.1	24.2	±1.8	22.7	±1.4	25.5	±1.4	22.7	±0.9	26.3	±1.9	22.8	±1.2
		O	22.7	±2.1	21.1	±1.4	24.7	±2.0	22.5	±1.5	25.2	±1.4	22.3	±1.5	26.0	±1.4	22.5	±1.2
大腿囲 cm	右	R	48.2	±4.2	49.6	±3.0	51.1	±3.0	52.8	±2.9	52.0	±2.7	53.3	±2.7	52.2	±2.9	53.7	±2.2
		O	45.6	±4.6	48.4	±4.5	50.6	±2.8	52.2	±3.9	51.8	±2.9	51.8	±2.4	51.7	±2.6	53.7	±3.1
	左	R	48.2	±4.2	49.4	±3.0	51.2	±2.8	52.3	±2.3	52.0	±3.1	52.7	±2.9	52.0	±2.5	53.6	±2.2
		O	45.3	±4.1	48.7	±4.1	50.6	±2.8	52.0	±3.7	51.7	±3.0	51.8	±2.1	51.7	±2.9	52.2	±2.9
下腿囲 cm	右	R	33.6	±2.3	35.0	±3.1	36.2	±1.9	35.4	±1.7	36.7	±2.6	36.6	±1.3	37.7	±1.8	36.1	±1.9
		O	33.1	±2.6	33.7	±4.0	36.1	±1.7	35.1	±2.0	36.3	±2.2	35.4	±1.2	36.4	±1.9	36.4	±2.3
	左	R	33.9	±2.4	35.1	±3.0	36.5	±2.1	35.2	±1.8	36.8	±2.7	36.5	±1.6	36.8	±1.9	36.1	±1.5
		O	33.1	±2.7	33.7	±3.9	35.3	±2.0	35.3	±2.7	36.3	±2.4	35.7	±1.3	36.5	±1.8	36.3	±2.4

R＝レギュラーメンバー　　O＝その他の部員

結果と考察　第二表は各種別ごと（中学男・女、高校男・女、大学男・女、一般男・女）に各項目の平均値および標準偏差を算出し全国平均ただし身長、体重、胸囲のみを比較対象し検討したのである。（文部省体育局、四三年三月発表の体力、運動能力調査報告書資料）

全国平均より総体的に優れていることは当然であろうが、中学男子で身長一〇糎以上、体重で七・五瓩、胸囲で四・四糎と著しく優れているのには驚かされた。それに比して高校男子では大きな差をみることができず、むしろ大学男子の方が優っている差が多かった。

一般男子が大学男子より身長、体重、胸囲で僅かではあるが、劣っていたのである。

発達段階で男・女とも中学から高校の間で著しい発育発達が示されているが、高校から大学では殆んど発達がみられなくなり、大学から一般では全く発育発達の停滞があらわれている。また中学男子で前腕囲が上腕囲より僅かであるが発育発達しているのがみられるのは、身体の発育段階を促していることがうかがわれたのである。

第三表は各種別とも各項目ごとに、レギュラー・メンバーとその他の部員にわけて平均値と標準偏差を算出したのである。各種別とも総体にレギュラー・メンバーが優れていることは明瞭で、中学男子において身長で七・二糎、体重六・三瓩、胸囲四・三糎、上腕囲、大腿囲と顕著な差をもっていた。中学女子、高校男子は僅かづつ各項目とも優れていたが、高校女子で身長胸囲で優れているにもかかわらず体重と上腕囲で劣っていたのは特異な現象であった。大学男子では各項目とも僅かであるが優れ、女子でも身長でやや劣っていたがそのほかは優れていた。一般の部では女子の下腿囲で〇・二〜〇・三糎劣っていたほかは全体に優っていたのである。第二表と同様に発育発達期に差の大きくでていたのも相関関係があると思われる。

第四表は一般男子と大学男子のレギュラー・メンバーの各項目を東京オリンピックのバレーボール日本選抜チーム、バスケットボール日本チームと、サッカー全日本の六〇年、六一年度候補選手との比較および一般女子と大学女子のレギュラー・メンバーと日本バレーボール（日紡）チームとを比較したのである。

特にバレーボール、バスケットボールを他種目から抽出したのは日本選手の中では最も外国選手群に接近している種目であるところからで、サッカーはプレイヤーの形態が類似していた点からである（東京オリンピック科学研究報告二二四頁、二五〇頁、二六二頁参照）。

バレーボール、バスケットボールはゲームの特殊性から身長が一〇糎以上もハンドボール・プレイヤーより優れているのと体重も一一瓩〜一三瓩も多く、他の項目においても大きな差を示しているのである。ただしバスケットボールの前腕囲が逆にハンドボール・プレイヤーよりやや劣っていることは、他の項目で著しく優っている点からみると競技の性質の特殊性がうかがわれるのではないかと思われる。

サッカーと比較してみるとハンドボール・プレイヤーと形態的には全く同じようであるが、ここでも胸囲においてハンドボール・プレイヤーの方が五糎も優れているのは、やはり競技の特殊性のあらわれであろう。残念なことにサッカーの表で上腕囲、前腕囲、大腿囲、下腿囲がなかったことでありこれらの項目があれば更に特殊な点が認められたのではないかと思われたのである。

女子の部でバレーボール・チームとの比較であるが、オリンピック大会において優勝した世界的なチームであるところから、ハンドボール・プレイヤーより全項目に顕著な差をもって優っている。身長で一〇糎、体重で八・三瓩、胸囲で四糎、その他上腕囲、大腿囲等でもはるかに優っている。

第 4 表

		一般男子（ハンドボール）		大学男子（ハンドボール）		日本選抜（男）バレーボール		バスケットボール日本チーム（男）		サッカー全日本60年度，61年度候補		一般女子（ハンドボール）		大学女子（ハンドボール）		日本バレーボール（日紡）	
		X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD
身長 cm		170.9	±4.3	171.7	±5.5	181.6	±6.1	183.3	—	168.9	±4.77	158.0	±7.6	158.6	±5.9	168.1	±5.7
体重 kg		63.1	±4.7	63.2	±5.1	74.8	±4.1	76.2	—	63.3	±4.53	55.0	±4.0	55.0	±4.1	63.3	±4.7
胸囲 cm		88.9	±4.1	90.2	±4.1	93.4	±3.5	92.8	—	85.2	±2.61	83.4	±2.6	83.0	±2.8	87.9	±3.7
座高 cm		—	—	—	—	—	—	98.0	—	92.4	±3.39	—	—	—	—	—	—
上腕囲 cm	右	26.8	±2.3	26.9	±2.4	27.9	±1.5	27.1	—	—	—	25.6	±2.0	24.7	±1.8	26.1	±2.4
	左	26.5	±1.9	26.3	±2.1			27.1				24.7	±2.2	24.1	±1.4		
前腕囲 cm	右	26.9	±2.2	26.1	±1.6	27.6	±1.2	26.0	—	—	—	23.5	±1.1	23.3	±1.1	24.5	±1.5
	左	26.3	±1.9	25.5	±1.4			25.4				22.8	±1.2	22.7	±0.9		
大腿囲 cm	右	52.2	±2.9	52.0	±2.7	56.0	±3.0	—	—	—	—	53.7	±2.2	53.3	±2.7	56.4	±4.5
	左	52.0	±2.5	52.0	±3.1							53.6	±2.2	52.7	±2.9		
下腿囲 cm	右	37.7	±1.8	36.7	±2.6	38.5	±1.7	39.4	—	—	—	36.1	±1.9	36.6	±1.3	37.6	±2.4
	左	36.8	±1.9	36.8	±2.7			38.8				36.1	±1.5	36.5	±1.6		

本来はこれらのチームと比較検討するのは、ハンドボールでもわが国一般の部、大学の部の上位チームか、ナショナル・チームを取扱うべきであろう。

次にグラフで示すことができなかったのであるが、高校男子のTスコアーをみると長身者が多いのに比して、体重の分布が低いことが示されているところをみると、痩身者が比較的多いように思われる。高校女子ではその傾向がでていなかった。

まとめ　この一回だけでハンドボール・プレイヤーの特殊性とか長所・短所を決定することは早計となるし、断定することも不可能である。また残念なことに一般男女、大学男女の資料が少なかった点である。このような測定ではレギュラー・プレイヤーとその他の部員とわけたのと、各種別上位チームとの平均値を算出すべきであろう。今後各種別のTスコアーを更に研究してみたり、継続することにより、性格、体力の推移を把握したい予定である。愛読者のみなさん測定項目や方法その他お気づきの点がありましたら是非御一報下さい。

全立教多彩な攻守で栄冠

女子 大崎田村紡降し優勝

国内最上位男女8チームによる激突は、男子が全立教（東京）女子が大崎電気（埼玉）の勝利に終った——第15回全日本選抜選手権は12月18日から22日まで東京体育館に日本協会の推せんをうけたトップチーム男子8、女子8チームが参加して開かれた。

4チームづつ二組による準決勝リーグは、男女とも強豪が順当に勝ち進んだが、女子A組で高校ナンバー・ワンの菊池農高（熊本）が社会人、学生を相手に堂々の勝負を演じて2勝、決勝リーグへ進出するという快挙があった。

決勝リーグでは、男子は全立教と日体大（東京）が無キズで最終日に対決、二転三転の好ゲームの末、全立教が快勝。2年ぶり3度目の優勝を飾るとともに8月の全日本総合につぐ二つめのタイトルを掌中にした。

女子も、大崎電気と田村紡（三重）が全勝でぶつかり、大崎電気が田村紡必死の反撃を辛うじてかわし2年ぶり3度目の優勝を遂げた。

男子準決勝リーグ A組

イーグルス善戦

日体大（東京）19（10－6 / 9－10）16 大阪イーグルス（大阪）

【主審・岡村】

日体大OBで編成され、ゲーム運びに老練な大阪イーグルスに、関東大学の上位にランクされ、学生界の実力者で、スピードと強烈なシュート力を誇る、しかも後輩に当る日体大との対戦は、開始すぐ、日体大のミスをイーグルスが逆襲してゲットして始まったが、日体大は長身選手の活躍とフットワークのよさで大阪イーグルスのポイントをおさえ、攻めては早川藤中がよく好シュートを決めてリードしペースを握った。イーグルスもベテラン東の好リードを中心によく動いたが、パス、動きが小さくなり、ミスが多くなった。

後半、大阪イーグルスはよく追いあげてきたが、前半の差が決定的となった。大阪イーグルスはパス・カットやシュート・カットなど非常にうま味のあるプレーを折々見せてくれた。日体大は縦の速い動きに加えて、セットプレーであせらずじっくり攻めることができれば、もっとミスの少ないさらに好ゲームが展開されたのではないか。

若さに勝る日体大に前半差をつけられながらも、後半良く追いこんだ大阪イーグルスの健斗はたたえられよう。今少しのスタミナがあればと惜しまれる（佐野）

年次優勝チーム

	（男子）	（女子）
①昭29	日体大	春日丘ク（大阪）
②昭31．3	日体大	日体大
③昭31．12	全芝工大	日体大
④昭33	日体大	半田高（愛知）
⑤昭34	◎全日体大	寝屋川ク（大阪）
⑥昭35	◎全芝工大	熊本ク
⑦昭36．1	全日体大	熊本商大ク
⑧昭36，12	大崎電気	◎愛知紡
⑨昭37	全日体大	◎愛知紡
⑩昭38	全日体大	大崎電気（埼玉）
⑪和39	全立教	田村紡（三）
⑫昭40	芝浦工大	田村紡
⑬昭41	◎全立教	◎大崎電気
⑭昭42	芝浦工大	◎田村紡
⑮昭43	◎全立教	大崎電気

①～⑪は全日本室内総合選手権と呼称
◎印は夏の全日本総合との2冠チーム

終始シーソーゲーム

大崎電気KK（埼玉） 27（16－10、11－11）21 中央大学（東京）

【主審・佐野】

中大はスローオフ、と同時に大崎防御の虚をついて右45度からカットインしてゲットしたが5分～10分の間に大崎は大量5点を奪取していて、ペースを大崎のものとした。その後、中大は喜田が好シュートでゲットして追い、大崎もベテラン竹野がよくチームをしめ自からもよくゲットした。後半に入り中大は右サイド児玉を生かすプレーで対抗したが大崎も近藤がうまいシュートで応戦シーソーゲームを展開したが、終了7分前、大崎西村がよく走って決め、均衡を破り、中大はここでペースを乱し、さらに中大のミスを大崎が確実に生かして差をつけた。中大はせり合ったときもっと若さを生かして食いさがるプレーをみせて欲しかった。　（佐野）

日体大、中大をふりきる

日体大 18（9－7、9－6）13 中央大学

【主審・佐野】

学生同志の活気に溢れたゲーム展開で見ていても迫力にみちていた。特に走・投のスピーディーなことは両者共に甲乙つけ難い。中大はロング、ポスト、サイド攻撃と多彩なコンビネーション作戦で日体大の堅陣を突き破ろうとしたのに対し、日体大は特にロングとポストを多用した感がある。後半日体大はメンバーチェンジした高橋がディフェンスの弱点をよくつき連続4点をあげて食い下っていた中大をつき離していた。日体大のエリア上への浮き球プレーがしばしば奏効したが、中大守備陣の中央の飛込みに対する動きが不足しすぎた終始両チームよく動き両ゴールキーパーともよくファインプレーを演じ観衆をわかせた好ゲームであった。

この大会、好調であった日体大はこの試合はもつれるであろうとの一般の予想をうらぎり、見事に中央大学を全くよせつけずに快勝した。特に大量得点をあげるゲッターはいないが、誰もが平均した得点をあげられる日体大のオフェンスは力強さを増した。ディフェンスは定評通り堅く、チーム力は向上している。　（岡村）

開会式

イーグルス後半健斗

大崎電気 18（11－5、7－9）14 大阪イーグルス

【主審・岡村】

前半10分過ぎまでは相互に決定打がなく2対2であったが、大崎の飯田がミドルシュートで連続得点をあげペースをもどし、大阪イーグルスのポストプレーを阻止する守備に切替えてパスを通さずカット作戦をとり速攻を決めてリードした。一方大阪イーグルスはつまり過ぎの攻撃でミドルシュートが打てず得点をあげるのに苦労したが、後半になって大崎がメンバーをかえてから速攻とクロスからポストに落すプレー、左腕のジャンプシュートで得点をつめ、追込んだが、前半の差は最後までひびき、後半よく健斗したが、ついに大崎の老練なゲーム運びに屈した。大崎の竹野、福本の好リードは若いプレーヤーの士気をあげるに最も効果的であった。一方大阪イーグルスのフリースローからのポストプレーのコンビは見事で見るべきものがあった。　（岡前）

中央大学 19（12－7、7－11）18 大阪イーグルス

【主審・磯部】

両チームも二敗し、すでに決勝リーグに進出する望みはなくなっていたが、良く戦い、選抜大会らしい試合を見せてくれた。

前半は中央のペース、後半はイーグルスのペースと云った試合運びであった。

前半中央は先手をとると、堀切喜田の活躍で着々加点し、終了間際にも喜田が得点し、5点差で前半を終了した。

後半に入ると、イーグルスは松尾を皮切りに7分まで連続4ゴールをあげ12－11と差をつめた。12分には13－13と勝負を振りだしにもどし、再び中央が2点リード、イーグルスがおいつく。その後20分をすぎてから中央のあげた3点も28分には東のシュートで三度び同点としたが、終了間際の喜田のシュートでついに力つきた。白熱の一戦であった。　（藤本）

日体大ー中大戦

準決勝リーグチーム別個人記録

～男子A組～

【日体】		イ	中	大
K	本田	0	0	0
	大村	0	0	0
F	早川	5	2	1
	森	2	1	0
	井上	4	3	0
	藤中	2	4	1
	谷藤	4	2	4
	大川	0	2	0
	笠原	2	1	1
	高橋	×	3	5
	斎藤	×	×	1
	塩崎	0	0	×
	松原	0	×	×
		19	18	13

【大崎】		中	イ	日
K	福本	0	0	0
	下里	0	0	0
F	井上	3	3	1
	西村	3	2	4
	近藤	7	3	3
	近森	3	3	2
	飯田	4	4	2
	竹野	6	3	0
	片山	1	0	0
	簱野	0	0	×
	太田	0	×	×
	佐藤	×	×	0
	谷口	×	0	0
		27	18	12

【中大】		大	日	イ
K	望月	0	0	0
	井上	0	0	0
F	佐野	3	1	3
	森山	1	1	2
	児玉	5	2	2
	堀切	2	3	4
	喜田	7	3	5
	植木	3	3	0
	長広	0	0	1
	植田	0	0	2
	佐藤	0	0	0
		21	13	19

【大阪】		日	大	中
K	島崎	0	0	0
	広川	0	0	0
F	福井	5	4	1
	東	3	2	5
	樫塚	3	1	2
	松尾	1	0	2
	青木	4	3	2
	北岡	0	0	4
	井上	0	2	2
	加藤	0	2	0
	大村	0	0	×
	奥浜	×	×	0
		16	14	18

日体大、若さの逆転勝ち

日体大 13（6―4, 7―8）12 大崎電気

（この試合は決勝リーグに適用）

【主審・岡村】

○……激戦だった。先手は大崎が5分速攻から西村のゲットでとったが日体大もすぐとりかえし一進一退の経過から、日体大は鋭いタテの突進で得点、2点差をつけた。

球趣が高まったのは後半である大崎は開始直後西村のゲットで5―6、7分井上、9分近藤がそれぞれ相手の虚をつく巧シュートで得点、8―7とリードを奪った。

日体大もひるまず反撃したが、大崎は六たびめの同点（10―10）から19分と21分、日体の強引なシュートをストップしたあとGK福本のすばらしい球出しを西村がみごとに活かして連続ゲット、12―10とした。

○……残り時間9分。若い日体大は好機を焦りから二度ほど落としたが、熱気をはらんだ場内のムードにのって展開のテンポがはやまり、大崎を次第に圧迫、なだれこむような迫力をともなった速攻で25分高橋、27分谷藤が得点、12―12とし27分30秒にも、同じような形から藤中が満身の力をこめた逆転シュートに成功した。

○……大崎はこの直後、7MTを得たが、飯田のシュートをGK本田があざやかにストップ、逃げ切った。

勝負どころで与えた4本の7MTのうち3本を食いとめた本田の冷静なプレーは日体大の大きな勝因である。

大崎は、後半2度にわたる2点のアヘッドも完全に日体大の若さと力にはねかされてしまった。

ハンドボールの醍醐味を満喫できたスリリングな好試合だった。

（杉山）

【A組順位】①日体大3戦全勝②大崎電気2勝1敗＝以上決勝リーグ進出③中央大1勝2敗④大阪イーグルス3敗

男子準決勝リーグ B組

芝工大 22（8―6, 14―6）12 埼玉教員
（東京）　（埼玉）

【主審・岡前】

スローオフ直後、芝工大は早いボール廻しで3点をリード。秋季学生リーグの不調だった影はみえず生き生きとしたプレーぶり。教員界の最高峰をいく埼玉教員はポイントゲッター北井の左腕が冴えきれいなジャンプシュートをはなってはいたが、教員のため学期末の練習不足は次第にゲームにあらわれはじめた。

北井のみにボールが集まり、ポストもサイドも釘付けでフォローアップが遅い。これは芝工大の守備のよかったこともあるが、足が動かないという感じだった。芝工大は前半に2点差をつけ優位にたって後半を迎えたが、相手のミスに乗じた速攻はスタートよく後半15分には完全にゲームの主導権を握った。芝工大にはこれといった特色は見られなかったが、チャンスを一つづつ確実に自分のものにしていったことが目についた。リーグの不調を地道なプレーから出直す態度は良いと思う。（岡村）

全立教 23（13―10, 10―7）11 三景
（東京）　（東京）

【主審・岡村】

○……同型チームの対戦だったがプレーのスピードは全立教がはるかに上。5分北村の先制点にはじまって10分までに4得点、あっさり試合の主導権を握った。

三景も、よくボールを廻していたが相手のディフェンスをくずすにはもうひとつ速さが足りない。12分7MT（榊）でやっと1点をあげ、あとに散発的に気勢をあげたにとどまった。（杉山茂）

全立教 19（8―3, 11―7）10 埼玉教員

【主審・島田】

埼玉は北井、結城の二人しか得点源がなく、その上北井がガッチリマークされると、全く得点ができなくなった。前半は結城の活躍で10分をすぎる頃まで対抗していた埼玉教員も15分をすぎる頃から立教のペースに全くはまり、点差を拡げられた。

加えて、埼玉教員はカットおよび力のないシュートをしてキーパーボールからの速攻を決められ立教に着々点差を拡げられ、大差で敗れた。（藤本）

三景良くおいこむ

芝工大 17（9―6, 8―10）16 三景

【主審・岡前】

芝工大は出足を慎重に運び、よこに動き、早いパスで三景の守備をまどわし自己のペースにもち込み45度からのジャンプシュートを決めて三景をつきはなし、連続得点をあげて前半をリードしたが、三景は後半江名の好リードによって榊その他の者が次々と得点、又江名の巧妙なサイドからのシュートで同点とした。それ以後は芝工大、三景共に相ゆずらずシーソーゲームを展開、芝工大の力と三景の技との対戦で観衆をわかせる好ゲーム、最後まで余断を許さぬ好試合となった。芝工大は終了を前にゲットして1点リードしてそのままかと思った瞬間、三景の速攻が尾形からのキーパーボールで出て江名に渡り、同点引分けかと観衆大拍子という場面になったが老練な江名も態勢をくずしてゴールキーパーに阻止され惜しくも敗れた。三景にも江名級のプレーヤーが今1人いれば負担もやわらぎ得点力も倍増されるものと惜しまれる。

（岡前）

準決勝リーグチーム別個人記録
～男子B組～

【立　教】		三	埼	芝
K	川口	0	0	0
	天野	0	0	0
F	木野	4	1	3
	北村	3	5	8
	野田	3	2	7
	東	3	5	4
	小野口	4	4	5
	戸田	1	0	1
	有永	5	2	1
	加藤	0	0	0
	倉前	0	0	0
		23	19	29

【芝　浦】		埼	三	立
K	高橋	0	0	0
F	秦	5	0	3
	村上	3	5	3
	白神	2	2	0
	高鍬	4	1	1
	明石弟	3	3	1
	大江	2	4	1
	大矢	3	1	1
	森	0	1	2
	金子	0	0	0
		22	17	12

【埼　玉】		芝	立	三
K	高橋	0	0	0
F	三枝	0	0	1
	松田	1	0	2
	北井	7	3	7
	結城	3	7	5
	高田	1	0	4
	上久保	0	0	0
	金子	0	0	0
	多勢	0	0	0
	高戸	0	0	0
		12	10	19

【三　景】		立	芝	崎
K	尾形	0	0	0
	小野	0	0	0
F	竹村	1	0	0
	江名	1	3	1
	外間	1	1	0
	榊	1	8	5
	高梨	4	3	3
	内藤	2	1	5
	伊藤	0	0	0
	山原	1	0	1
	河原	0	0	0
		11	16	15

芝工大―三景

全立大 29（12―6 / 17―6）12 芝工大
（この記録決勝リーグに適用）
【主審・佐野】

全立大は木野・北村のOBを中心に、学生との意気をよく合わせ最後まで乱れぬゲーム展開をみせた。基本であるパス、シュート、フェント、走力共によくマスターされ、ミスの少ない動きであったスローオフ後、あっと思う間に芝工大の当りの激しい防御陣のうらをかいて、ポストプレーから北村をとび込ませて、先行、そのあとポストで芝工大の防御陣内の出足を封じて木野、有永、東などロングシューターがよく決め、サイドから野田が決めるなど多彩な攻げきをみせて一方的にリードを奪った。芝工大は動きも遅く、攻げきが小さくなり自滅していった。

芝工大は特意の速攻を殆んど封じられ、ミドルシュートも、全立大の出足のよさでカットされ、全く生彩のないゲームであった。（佐野）

埼玉教員 19（9―5 / 10―10）15 三　景
【主審・島田】

埼玉教員は常にベテラン北井を中心にした攻防を行なっているが前半、三景は北井をマークした、しかし結城、松田らがよく動いてゲットした。三景もベテラン江名の好リードを中心に、榊・高梨らがポイントをあげた。後半に入り抜群の得点力を持つ北井をフリーにしたため、左45度からの強烈なミドルをきめられた。三景も榊・高梨・内藤などがよく走って追いあげたが前半の差が致命的となった。三景の防御では、特に後半に入って前後の動き、シューターに対するディフェンスの甘さが目立ち、ミドルをフリーに打たせたのはよくなかった。（佐野）

【B組順位】①全立教3戦全勝②芝工大2勝1敗③埼玉教員1勝3敗④三景3戦全敗

女子準決勝リーグ A組

菊池　日体大を破る

菊池農高（熊本）11（5―3 / 6―4）7 日体大（東京）
【主審・磯部】

菊池農が日体大を破った。しかも堂々と。セットプレーでも、速攻でも菊池農は堂々たる攻撃で得点をとり、守っては得意のディフェンスで日体をおさえこんだ。

菊池農は6分速攻から剣が決めつづいて村上がポスト、サイド、ミドルとたてつづけに得点した。特に村上の3点めは見事なコンビネーションによって決めている。

一方日体は菊池の厚いディフェンスの前に全く手がでず、いたずらにボールを廻すだけであった。前半の日体の3点は、菊池のミスを拾って得点に結びつけた石井の2本の速攻と川口の7MTのみであった。

後半に入っても、先取点は3分30秒菊池の水上によってあげられその後も菊池はポストプレーとミドルシュートを効果的にミックスして使い得点を重ねた。

一方日体は焦りも手伝い荒いディフェンスとなった。セットプレーで得点をあげたのは6点めになってであった。

高校チームに対する大学チームプレーの点においても、マナーの点においても見習うべきは大学チームであったのは大学のレベルがいかに低いといわれていたとしても何といってもなさけないことであった。

菊池農は堂々として1勝をあげ超高校の前評判通りの活躍を見せた。（藤本）

田村紡績（三重）30（14―2 / 16―4）6 東京重機（東京）
【主審・碇】

とにかくよく動きす早い。これが田村紡績の本領だ。チャンスは決してのがさない。パスやボールキープのタイミングをよくつかんでいるし、フォローもチームワークがとれていて文句がない。ハンドボールのゲームの手本を示したプレー振りであった。東京重機はチーム力が向上したとはいえ、まだシャープさに欠け、しばしばボールの動きが単発になってしまう田村紡績のシュートは殆んどが倒れ込み前転シュートで体重やスピードが完全にボールに乗っている。守備面では田村紡績の小さい動きとポジションチェンジでのきめ細かさが目につき、東京重機はゆさぶりに対する動きの弱さが目についた。田村紡績としては申し分のない本日の試合ぶりであったのではないか？（岡村）

菊池農―日体大

準決勝リーグチーム別個人記録

～女子A組～

	【田　村】	重	菊	日
K	渡辺美	0	0	0
	坂　上	0	0	0
F	種　村	6	2	6
	渡辺好	4	1	2
	水　谷	9	2	4
	小　林	2	6	3
	清　水	4	2	4
	甲　村	4	1	2
	吉　開	1	0	0
	渡辺信	0	3	1
	若　林	0	×	0
		30	17	22

	【菊　池】	日	田	重
K	松　田	0	0	0
	中　川	0	0	0
F	村　中	1	1	2
	村　上	4	2	2
	蔵　田	2	0	4
	水　上	1	0	1
	田　尻	0	0	0
	剣	3	0	3
	鶴　田	0	0	0
	浜　中	0	0	0
		11	3	12

	【重　機】	田	日	菊
K	高　野	0	0	0
	川　本	0	0	0
F	山　本	2	4	3
	畑　岡	0	0	1
	滝　口	1	0	1
	島　田	1	1	2
	鷺　谷	1	2	1
	荒　井	0	0	0
	長谷川	0	0	0
	金　井	0	0	0
	牧　野	1	5	1
		6	12	9

	【日　体】	菊	重	田
K	小野里	0	0	0
	秋　間	0	0	0
F	川　口	1	1	2
	津　熊	0	0	1
	沢　谷	0	1	0
	中　村	0	1	0
	石　井	4	3	0
	古　川	2	0	1
	藤　田	0	0	0
	永　田	0	0	1
	山　下	0	0	0
		7	6	5

田村紡 17（8—1／9—2）3 菊池農高

（この試合決勝リーグに適用）

【主審・島田】

初戦で学生№1の日体大を降した菊池農高は今日も伸びのびとした試合運びであった。しかし田村紡績のロングを注意した2段ディフェンスは堅く鋭いピストンとポジションチェンジは見事。菊池農高はエリアにはいれない。折角ロングシューター村中がいるのにワンポストではディフェンスを引き下げることができない。またロングシュートが少ないことやサイド攻撃のないのも不思議だ。田村紡績は相手のミスに乗じた速攻は確実にものにするし、身長の大きい相手に対する攻撃をよく心得ていて、早いボール廻しと早目のフォローダッシュで菊池農高の守備陣を撹乱し、着実にポイントをものにしていった。エリア前の走りを止める方法を菊池農高が考慮すれば、もっと失点を少なくすませることができたろう。田村紡績のボールに対する執着と攻守の瞬間のスタートのよさは目を見はるものがある。特にサイドからのシュートは確実でありスピードもある。

（岡村）

東京重機 12（6—2／6—4）6 日体大

【主審・碇】

実業団のベスト上位にランクされている東京重機に昨日菊池農高に破れてはいるが女子学生界の王者である日体大はファイトを燃やして対戦したが、やはり東京重機のスピードシュート力が日体大をはるかに上廻っていた。日体大は攻げきのコンビや守備に難点があり、しばしばミスをやり、これを重機に拾われて、速攻に結びつけられていた。セットに入ってのボール廻しも遅く、最後のシューターに結びつかなかった。

重機もセットプレーではやはりまずく、両チーム共、今後に期待するのはロングシューターを養成して正確なセットプレーを展開することである。

（佐野）

菊池農、決勝リーグへ

菊池農高 12（5—4／7—5）9 東京重機

【主審稲石】

○……菊池農の勝因はたえずみせた攻守の積極さにあろう。

試合は立ちあがりから菊池農が先行、前半11分の7MTで2—1としたあと12分、16分あざやかな速攻で4—1と優位に立った。

重機の反撃で19分4—3から一進一退となり、後半3分5—5の同点。6、7分菊池農は連続得点したが、重機もすぐ追いつき12分7—7と二度目のタイムスコア。

○……菊池農の健斗もこのあたりまでかとみられたが、強気な攻めと守りをかえるどころか、それまでこだわっていたポストプレーから果敢なミドル攻法にスィッチ、14分蔵田、17分村中があざやかに重機ディフェンスを突破するシュートを決めて9—7。

重機は19分島田が速攻から1点を決めたものの、自信にあふれた菊池農は20分水上がバックハンドシュート、23分には相手のプレスディフェンスを水上が抜いてチャンスをつかみ村上がゲット、11—8と勝利を確実にした。

○……高校現役チームが決勝リーグ（ベスト4）へ進出するのは推せん選抜制になって初。

全員が終始思うとおりに試合を進めていく技心両面のたくましさは高校生ばなれしている。

そのうらずけになっているのは正しい基本技をマスターした自信ではなかろうか。特にディフェンスの力は相当なものだ。

高校チームという異色さを除いてみても地道な努力で築かれたチームによって〝新風〟が吹きこまれたことは今大会の収獲といってよいだろう。

（杉山）

田村紡績 22（13—0／9—5）5 日体大

【主審・碇】

田村紡績の快足と早いボール廻しはあざやか。セットオフェンスにはいってもフォローアップのコンビの良さ、速攻の確実性。日体大は全く歯が立たない。とにかくフリースローラインからエリアに近づけない状態が大半であった。女子ゲームで常に思うことは、サイド攻撃の少ないことだ。サイドからのシュートは困難性があるため完全に弱点になっている。中央の攻撃とポストのみに終始しているのはうなづけない。日体大がシュートチャンスに乏しいのもこのことが大きな要因になっているしボールの動きが単発でありフォローの遅さが目につく。今回絶好調の田村紡績ではあるが、もっと食いつけないものかと思う。

（岡村）

【A組順位】 ①田村紡3全勝戦②菊池農3勝1敗③東京重機1勝2敗④日体大3戦全敗

三菱—東女体大

準決勝リーグチーム別個人記録
～女子B組～

【大崎】		東	中	三
K	川崎	0	0	0
	山田	0	0	0
F	加藤	2	5	4
	早川	4	4	1
	鈴木	10	4	0
	木幡	4	4	0
	中野	4	5	0
	栗林	1	0	0
	日向野	4	3	1
	三浦	0	1	0
	小林	0	0	×
	山崎	×	×	0
		29	26	6

【三菱】		中	東	大
K	吉田	0	0	0
	本庄	0	0	0
F	鈴木	1	5	0
	蓮見	0	2	1
	落合	5	3	1
	小田島	4	3	2
	江川	0	8	0
	姫野	8	3	1
	三井田	3	1	0
	佐々木	2	1	0
	藤原	4	0	0
		27	21	5

【東女】		大	三	中
K	阿久沢	0	0	0
F	熊谷	0	0	0
	浅見	0	0	3
	高橋清	1	1	1
	中島	0	1	0
	高橋恭	1	3	1
	伊部	1	0	3
	関	0	0	1
	川井	1	0	0
	堀江	0	0	0
		4	5	9

【中京】		三	大	東
K	西岡	0	0	0
	佐野	0	0	0
F	安田	1	0	1
	森	1	2	1
	砂浜	2	0	3
	野口	0	0	0
	石山	0	0	1
	大塚	1	1	1
	稲井	0	0	0
	蒲庄	0	0	0
	窪田	0	0	0
		5	3	7

女子準決勝リーグ
B組

三菱鉛筆（神奈川）27（13—3、14—2）5 中京大（愛知）
【主審・島田】

三菱鉛筆は女子のゲームでは弱点とされているサイド攻撃をうまく利用して7米スローを連続して決め好スタートを切った。一方中京大は、フリースローライン前でのボールまわしはよいが動きながらのシュートに結びつかず、やたらシュートチャンスを逸し、無理な態勢から行なうスタンディングシュートも決定力がなく悪循環を繰返しミスを連発して三菱の速攻にあって大量点を許した。中京大は三菱鉛筆の多彩な攻撃について行けず中央突破をねらう作戦はうなずけない。三菱の広い攻撃を見てシュートチャンスには確実なシュートを打てるよう努力する必要がある。学生らしい動きを見せ張切ってプレーしたゴールキーパーの態度は若さがあふれて気持がよかった。（岡前）

大崎電気（埼玉）29（15—0、14—4）4 東女体大（東京）
【主審・碇】

大崎電気のデフェンスが堅く東女体はシュートが全部防御の手にあたる攻撃を重ね、出足のよい大崎の速攻を許して失点するのは一考を要する。守備面では動き過ぎが目立ち次の切込む者につけず中央を次々に突破されるのはチェンジのまずさが見られる。大崎はロング速攻のコンビがうまく合って見事な攻撃を繰広げ東女体は手も足も出ない状態でゲームの興味をなくす、東女体の奮気が望まれる。東女体のクロスパスがもっと大きく、するどい動きが伴なえば思い切ったシュートも打て大崎のディフェンスも動かせポストプレーもつかえるものと思われた。（岡前）

大崎電気 18（14—3、4—0）3 中京大
【主審・磯部】

中京大は田村紡と似たスタイルでよく走りパスをまわすが、シュートに結びつける動きがなく、パスゲームの感があった、その間にミスを続発し、あるいは大崎のカットで着々とポイントをあげ、守っても中京大にシュートチャンスを与えなかった。後半も大崎はよく走って得点したが、セット攻げきに入って、もう一つ意図的に防御をあけさせるフォーメーションプレーが欲しかった。

中京大は、終了9分前になってシュートのリバウンドを好運にも拾って決め、続いて2点をきめ、ノースコアの記録をまぬかれた。中京大は、ロング・ミドルシューターの養成と速い動きからシュートに結びつく動きが修得できれば素晴らしいチームになるだろう。（佐野）

三菱鉛筆 21（11—2、10—3）5 東京女体大
【主審・碇】

○……互角に進んだのは最初の5分間だけ。三菱が1分30秒江川のゲットで先制、東京女体大も4分高橋恭の好シュートで追いついた

しかし、その後は、三菱が攻防両面でスピードのあるプレーを見せ、前半20分には9—2と点差をあけた。

東京女体大もよく走ったが、相手の崩れを誘うまでにはいかず主力の熊谷、姫野が病欠していたことも戦力をマイナスさせた（杉山）

東女体大 9（2—4、7—3）7 中京大
【主審・磯部】

前半は中京大のペースで試合は進んだ。中京大は10分までに石山で3—0。東女体大はこの間シュートを打つのがやっと、全く試合は中京の一方的なものとなった。東女体大は11分浅見のシュートでやっと1点をかえした。23分に伊部が7MTを決め、4—2にして前半をおわった。後半開始後も中京が有利に試合を進め、10分には7—4としたが、以後中京は15分間得点なく、逆に東女体大は連続5ゴールを決め、夏のインカレと全く逆に、逆転勝ちをし、雪じょくをとげた。（藤本）

大崎、辛勝す

大崎電気 6（4—1、2—4）5 三菱鉛筆
（この試合決勝リーグに適用）
【主審・岡前】

大崎電気は前半ディフェンスを堅め早いつぶしで、三菱鉛筆のロングシュートを見事に封じた。特に鈴木の動きが姫野のロングをつまりぎみに打たせるあたりは見事なプレーと云えよう。三菱鉛筆は中央攻撃を何度か行って見たが防御が堅く得点のチャンスが少なかった、もっとサイドから攻撃をすれば中央突破のチャンスもできよう。後半は逆に三菱鉛筆の小田島落合が得点のきっかけをつかみサイド、中央と次々にゲットして追込みムードを盛り上げゲームを面白くした、相互に知りつくしている両チームであるがため次第に、動きによってディフェンスを乱そうと目まぐるしいゲームを展開したが遂に前半の差を逆転するまでに至らず、三菱鉛筆は最少得点差に惜敗の涙をのんだ。（岡前）

【B組順位】①大崎電気3戦全勝②三菱鉛筆2勝1敗③東女体大1勝2敗④中京大3戦全敗

大洋、勤務の都合で欠場

今大会に推せんをうけた大洋デパート（熊本・全日本総合、福井国体各優勝）は、勤務のつごうで出場を辞退した。

大会中、上京していた同チーム井監督は『アルバイトを五百人近く雇うほど忙しい年末に、大会だからといって仕事を離れることはできません。今年は好調なので残念ですが、選手たちもわかってくれています』といっていた。大洋デパートの出場辞退はこれで3年連続。

なお、代りに推せんされたブラザー工業（愛知）も辞退したため東京女体大（東京）がくりあがった

全立教—日体 六たび同点

決勝リーグ（男子）

日体大 15（11―3 / 4―8）11 芝浦工大

得	【日体】		【芝浦】	得
0	本田	GK	高橋	0
3	早川	FP	秦	0
2	高橋		村上	0
0	森		白神	0
1	井上		高鍬	4
3	藤中		大江	3
1	谷藤		明石弟	0
0	大川	（主審 佐野）	森	1
2	笠原		大矢	1
3	斎藤		金子	2
15	（1）	7MT	（1）	11

前半、芝工大にミスが多く、かつ村上のロングシュートはすべて日体大の守備陣のカットにあい、それが日体大の速攻、得点につながった。特に芝工大の守備は悪く出足のなさが日体大の好調に協力をした。

後半に入ると芝工大のディフェンスは見違えるようによくしまり出足もよく日体大はフリースローラインから入ることが困難になり攻撃がつまりぎみでロングのコースもふさがれてしまった。メンバーチェンジが多かったのもコンビをチグハグにさせた原因になったのではなかろうか。芝工大は速攻と高鍬の好プレーで日体大を3点差まで追いこんだが、前半の8点差はいかんともし難かった。芝工大の後半の好ディフェンスが前半から出ていたならば勝敗は判らなかったであろう。（岡村）

全立教 17（6―8 / 11―6）14 大崎電気

得	【立教】		【大崎】	得
0	川口	GK	下里	0
			福本	0
4	木野	FP	井上	1
2	北村		西村	1
4	野田		近藤	4
2	東		飯田	1
1	小野口	（主審 岡前）	竹野	2
0	戸田		近森	5
4	有永			
17	（2）	7MT	（3）	14

○……全立教は6分までに2—1とリードしたもののそのごは思うように点がとれない。先発した大崎GK下里の好守にことごとくシュートを阻まれたからだ。

このスキに大崎は着々加点、17分には6—3と引きはなした。

挽回を狙う全立教ベンチはここで戸田に代えて長身・有永を送りこみ、木野、有永の左右コンビに球を集める策戦が奏功、二人の活躍で、20分には6—6とした。

○……しかし大崎も負けてはいない。22分近森、26分近藤、後半3分近森と好機を確実に活かし、再び3点差をつけた。

守っても全立教得意のサイド攻撃を封じ、前半20分から15分間近く無失点、ペースは完全に大崎が握ったかにみえた。

事実、ここであと一押しがあれば全立教も危かったろう。

○……リードされながらも反撃の機会を狙っていた全立教は、4分東のミドルシュートが決まるや、がぜん動きに鋭さが増し、あっという間に同点—逆転—リード（13分12—10）という快攻をみせた。

大崎は、20分にいちどは1点差までつめたが、そのあと連続4点を奪われ17—12。

大崎の地力減退を感じた。

○……全立教も決してよいできとはいえなかったが、キッカケをつかむと、多彩な攻め口を駆使して一気に試合の主導権を握る展開力はさすがにみごとである。

また再三のピンチを防いだGK川口のシャープな動きも勝因としてはずせない。（杉山）

大崎電気、逃げこむ

大崎電気 19（10―5 / 9―10）15 芝浦工大

得	【大崎】		【芝浦】	得
0	福本	GK	高橋	0
4	井上	FP	秦	1
3	西村		村上	1
2	近藤		白神	4
4	近森		高鍬	2
3	飯田		大江	4
2	籏野		明石弟	0
1	竹野	（主審 稲石）	森	1
0	太田		大矢	1
0	谷口		金子	1
19	（0）	7MT	（1）	15

前年優勝の芝工大は不調のドン底であり、大崎も調子がでずに、惜しい試合をおとし、二敗同士の対戦であった。

男子決勝

前半10—5と大崎がリード、後半芝工大がこれを追うと云う形の試合であったが、大崎は竹野、井上の好リードで芝工大の反撃を押え、三位の座を獲保した。（藤本）

全立教 15（8―7 / 7―5）12 日体大

得	【立教】		【日体】	得
0	川口	GK	本田	0
6	木野	FP	早川	2
0	北村		高橋	1
5	野田		森	1
2	東		井上	2
1	小野口		藤中	3
1	戸田	（主審 岡村）	谷藤	0
0	有永		大川	0
			笠原	1
			斎藤	2
15	（2）	7MT	（0）	12

全勝同士の対戦。前半14分までは全立大ペースで、5—1とリード。15分を過ぎてから日体が反撃し、4連続ゴールで22分30秒には6—6。その後1点ずつを加え、立教はノータイムの7mを野田が決め、8—7で前半を終了。

後半は日体が5分すぎに斎藤のミドルで同点、さらに井上がポストから決め、日体リード。木野のポストで追いつかれると、日体も藤中のミドルでつき放す。立教も野田が得意の右サイドから決め、5度び同点。10分から20分まで停滞状況が続き、先手をとったのは全立大の東。日体も早川のミドルで追いつき11—11の6度めの同点。その後、23分50秒、25分05秒、26分05秒と木野がとり、14—11として追いすがる日体大をつき放し、その後の日体の反撃を一点に押え優勝した。優勝を決めるにふさわしい白熱の一戦であった。（藤本）

決勝リーグ勝敗表

（男子）	立	日	大	芝	勝	負	得	失
全立教	…	○	○	（○）	3	0	61	38
日体大	●	…	（○）	○	2	1	40	38
大崎電	●	（●）	…	○	1	2	45	45
芝工大	（●）	●	●	…	0	3	38	63

（女子）	大	田	三	菊	勝	負	得	失
大崎電	…	○	（○）	○	3	0	31	18
田村紡	●	…	○	（○）	2	1	30	16
三菱鉛	（●）	●	…	○	1	2	25	19
菊池農	●	（●）	●	…	0	3	16	49

（ ）内は準決勝リーグの勝敗

田村紡、得意の速攻が不調

決勝リーグ（女子）

田村紡 6（4—1 / 2—4）5 三菱鉛筆

得	【三菱】		【田村】	得
0	吉田	GK	渡辺美	0
0	鈴木	FP	種村	2
0	蓮見		渡辺好	0
0	落合		水谷	0
1	江川		小林	3
2	姫野		清水	1
2	小田島	（主審 島田）	甲村	0
5	（1）	7MT	（2）	6

○……三菱は前半12分小田島のゲットで先制したが、田村も小林の連続得点ですぐ逆転、前半終了間ぎわにはポストプレーから2点をあげて4—1と優位に立った。

しかし、田村紡はいつになくハンドリングが悪いうえ、フォローのタイミングも乱れ、再三、得点機をつぶしていた。

○……後半6分田村は小林がサイドから決めて5—1としたものの、パスワークの乱れはなおらず、三菱はじわじわと反撃、21分姫野の7MTで5—6とつめよった。

追うものの利、三菱にブのある戦況となったが、24分落合がインターセプトから独走という絶好のチャンスに、あせってシュートをバーへあててしまい、田村紡の逃げ切りを許した。

三菱にとっては後半追いこんだだけに前半の低調が悔やまれよう。田村紡も、かっての威勢のよいタテへの突進がみられず、お家芸のショートパスもつながらずとあって薄氷を踏むような試合だった。（杉山）

大崎、菊池農をよせつけず

大崎電気 17（8—2 / 9—4）6 菊池農高

得	【菊池】		【大崎】	得
0	中川	GK	川崎	0
0	村中	FP	加藤	3
3	村上		早川	1
0	蔵田		鈴木	2
1	水上		木幡	3
0	田尻		山崎	0
2	剣		中野	6
			日向野	2
		（主審 稲石）	三浦	0
6	（0）	7MT	（2）	17

決勝リーグに残った菊池農高ではあるが、大崎とは格段の差、大崎はセットプレー、速攻と点を重ねた。菊池は後半に入るとやっとポストプレー、ミドルシュートに良いところを見せ、よく6点をあげた。3本のパスを見事につないだプレーから村上にミドルを決めされるなど高校生離れしたプレーを見せたのは良かった。荒けずりではあるが、チーム全員良くハンドボールを知っていて、体も良いし菊池農の諸選手の将来は大いに楽しみである。大崎も新進選手の育ち方はいちぢるしいので将来のチーム力は向上しよう。（藤本）

菊池農、三菱から7点

三菱鉛筆 15（9—2 / 6—5）7 菊池農高

得	【菊池】		【三菱】	得
0	松田	GK	吉田	0
0	中川		本庄	0
1	村中	FP	三井田	1
2	村上		鈴木	0
3	蔵田		蓮見	2
0	水上		落合	2
1	田尻		江川	1
0	剣		姫野	6
			小田島	3
		（主審 岡前）	藤原	0
7	（2）		（1）	15

選抜大会に出場して日増しに、ゲーム展開にうまみをみせてきた起高校級の菊池農高だったが、さすがに全日本上位の三菱はよせつけなかった。しかし菊池も最後まで頑張りロングシュート、ポストプレー等、を生かし7点もあげたのは立派だった。三菱は菊池のミスを拾って走り、セットでは姫野が好シュートを放って、快勝した。一方菊池農は水上が不調でボールのまわりも悪く、動きながらのリズミカルな攻撃を忘れミスが目立った。菊池のディフェンスは昨日のようなピストンが見られず、三菱のロング・シュート又はポストプレーを自由にさせる感が見られ前半で勝負が決した。しかしながら菊池農高は速攻とフリースローからのうまい攻撃で最後までゲームを捨てずに1点でも加点しようとする、きびきびとした動きと執念あるプレーは観衆の好感を呼びその健斗ぶりは見事であった。

菊池の選抜大会での活躍を賞したい。と同時に、かっての静岡城北高、今回の菊池農高に続く超高校級のチームの出現を期待し、今回の出場が斯道、特に高体連のハンドボール界の刺激剤になればと思う。（佐野・岡前）

大崎電気 8（4—3 / 4—4）7 田村紡

得	【田村】		【大崎】	得
0	渡辺美	GK	川崎	0
5	種村	FP	加藤	0
0	渡辺好		早川	0
0	水谷		鈴木	4
1	小林		木幡	1
0	清水		山崎	1
1	甲村		中野	2
		（主審 佐野）	日向野	0
7	（0）	7MT	（0）	8

前半は大崎がセットプレーで鈴木を中心に良く攻め、押し気味に試合を進めた。一方の田村は得意の足が生きず、種村の個人プレーで得点をするのみ、これは大崎のディフェンスが固かったことが大きな原因となっている。後半に入ると、大崎は鈴木、木幡、中野と得点をあげ、20分には7—3と4点差にし、大勢を決っしたかに見えた。20分すぎに田村は小林がサイドから、21分に速攻から種村が決め、7—5とし、ここでマンツウマンによるプレスディフェンスを布き、がぜん試合はもりあがった。24分35秒に甲村が決め1点差。しかし、大崎は10秒後に鈴木がプレスに出ている田村陣内をドリブルで抜き完全にダメを押した。終了2秒前に種村がミドルを決めたが、遅かった。

女子決勝　大崎—田村

大崎は中野らの新進が良くのび力をつけていたことが勝因であろう。それに中央部をよく固めたディフェンスと勝負時に得点をとった鈴木の活躍は忘れることはできない。一方田村紡は縦のつっこみがなく、ミスが多すぎ、種村しか決め手がなかったことが敗因となろう。後半中途点差が離れて、興味をそがれる場面があったが最後の5分で試合はもりあがり、決勝戦らしい好試合となった。大洋デパートを加え四強が対する2月の実業団が期待される。

（藤本）

全日本選抜の問題点

杉山　茂

技術的には、まったく文句のないこの大会も、運営面ではまだまだ研究すべき課題が多い。

今大会の出場チームが決定されるまでには長時間の論議が4回もくり返されたというが、それというのも「出場規定」があいまいなまま放置されているからだ。

基準も定めず「選抜」するのは無定見だし、権威もなにもあったものではない。

それでも今回は「実力主義」を強く打ち出し、これまでのような一本勝負での成績重視が廃されていたのは進歩である。

しかし、それによって選こう基準を定めぬルーズさが許されるものではない。

毎年、少くとも夏の全日本大会終了後にはその年の方向を公けにすべきであろう。

出場チームの決定が遅れることによって、大会準備がまったく出来ないことも当事者は反省しなければなるまい。

今回、観客動員や競技収入面を担当したのは藤本、久田両常務理事だが準備期間の短かさを嘆いていたし連日「興行師の心境」だったらしい。決勝リーグに進んで三千（第4日）、四千六百（第5日）とファンの出足は伸びたものの、最初3日間は寒々とした〝入り〟（延五千）に終っている。

せめて、十一月初旬に出場チームが決まっていれば宣伝も行きとどくし、中学生無料招待ももっと成果をあげ得たであろう。

出場チーム、大会日程なども再検討すべき時期に来ている。

「6チーム5日間総当り」「4チーム3日間総当り」の両論は特に強い。

オリンピックまでは、男子8、女子6にしたらどうかという声も聞かれているし、山田常務理事は「チーム数は現行のままとし、準決勝リーグを東京以外の4都市で行えば……」という。

準決勝リーグなら一組4チーム3日間で済み、地方協会でも運営（開催）の引き受け手はあろう。

精選されたチーム同士とはいえ一会場で一日8試合はやはり多すぎるし、審判員も複審制が布かれれば一日16人が必要である。山田説は面白いと思う。

いずれにせよ「よい試合を多くの人々に……」という構想を盛ったこの大会が、運営面で多くの課題を残しているのは肯けない。チームやプレヤーのレベルアップに比して、日本協会の運営感覚――企画能力、事務能力がいささか遅れ気味なのは遺憾である。（NHK運動部）

話題をさらった　菊池農の活躍　選抜に拾う

▽……まさに「菊池農旋風」だった。大会前半は例年なら平穏な雰囲気なのだが、なんとはなしに騒がしかった。

報道陣も、冬枯れの時期に絶好の話題だとばかりに書きたてた。

静かだったのは当人たちだけといってもよかった。

『思い切りやれといっただけですよ』。試合終了後、荒木時弥監督は、いつでも必ずこういった。

選手たちも『負けてもともとだから……』と笑うだけ。水上主将は『去年、修学旅行に参加できなかったので、後半は東京見物をしようと上京して来たんです』といってペロリと舌を出した。なんとも無邪気な〝台風の目〟だ

▽……大会前の選こう委員会で実業団4強についで推せんが決まったのは菊池農高である。

インター・ハイ、福井国体で見せた抜群の攻守は、誰の目にも高校以外の強者と対戦させてみたいとうつったわけだろう。

荒木監督も内心は自信があったようだ。国体後、熊本協会を通じて日本協会へ「推せんされるようなら出る」といってきている。

▽……このチームの特色はスケールの大きさでも、豊かなスピードでもない。その点だけなら同校以上の高校チームがこれまでにも輩出されている。

躍進の因は基本の確かさとチームワーク、それにファイトだ。

東京に来て、前から痛めていた腰が悪化した水上主将は毎日太い痛みどめの注射をして出場していた。試合が終ると同時にほとんど歩けないほどの状態だった。

しかし、そのリードマンぶりを見ていると、とてもそんな〝重傷〟とは思えない。彼女はこう答えたものだ。『試合中は不思議に痛くないのです』……。

▽……研究心も旺盛だ。たとえばGKのタイミングをはずしてフワッと投げるシュートを再三みせたが、これはいつも練習相手になってもらう全日本チャンピオン大洋デパートになんとかひとあわと思って考え出したのだそうだ。

この大会でも、寒いスタンドで最後の試合まで必ず見学していった。3年生10人のうち関東学生界への進学希望が2人、実業団への入社内定が5人いる。

春秋に富んだ彼女らの健斗がいっそう大きな花を咲かせるよう期待をもって見つめていきたい。

（X）

球界パトロール

底辺開発に関係者の地道な努力

――県教職員大会（熊本）と自衛隊選手権（関東）

▽……〝底辺開発〟—地味な、根気のいる仕事である。

昨年くれ熊本で開かれた「県教職員大会」、横浜で行われた「関東地区自衛隊選手権」はそうした努力が咲かせた大きな花といえるだろう。熊本の「県教職員大会」は熊本国体（昭35）の翌年にスタート、すでに9回を数えている。

▽……親睦にあわせて、指導者の育成、競技の普及をはかろうという一石三鳥の主旨が理解され、昨年くれの大会には高校教職員の部に19、小中学の部に6チームが集まった。

どのチームも経験者の数は少ない。この大会を通じて愛好者になった〝選手〟がほとんどで年令もまちまち。個人賞の中に「最高年令賞」というのが設けられ、今年度は平井直重氏（58才・鎮西高）と猿渡元義氏（56才・白川中）がそれぞれの部門で受賞者に決まった

▽……熊本の教職員チームは全日本教職員、国体などでつねに最上位へランクされる強者だ。その影響もあってこの大会で展開されるプレーも、未経験者中心とはいえなかなか鮮やかなものがあり、『どんなものだ』と応援の生徒に胸をはる先生の顔はなんとも誇らしげである。

チームのなかにはこの大会だけでは物足りず（?）、県大会などに打って出るところもあり、9年間の足跡は情熱・技術ともにいちだんの高まりをみせている。

▽……一方、今年から始められた「関東地区自衛隊選手権」は、このところ急速に発展、拡充している自衛隊球界初めてといってもよい大会で、その成果が注目された。

横須賀市の防衛大陸上競技場に参加したのは陸上、海上自衛隊関係各6、それに自衛隊体育学校、防衛大A、Bの計15チーム。

▽……優勝は、全日本の各種大会にも再三出場している勝田施設学校（茨城）が関東学連所属の防衛大Aを降して飾ったが、各チーム・各試合とも内容豊富、今後の成長を大いに楽しませた。

実は、この大会4、5年前にも2回ほど開かれたのだが時期尚早から大きく発展せずに消滅してしまった。いちど散ったものを再び実らすのは容易なことではない。

それがみごとに復活できたのは関係者のひたむきな努力と、自衛隊のハンドボールに対する関心の深さを示すものにほかならない。

▽……海上自衛隊では全国規模の大会開催を計画していると伝えられるし、体育学校も積極的だ。

自衛隊球界が日本ハンドボール界の〝新しい波〟としてその若い力を伸ばしてくるのはそう遠いことではなさそうである。（X）

（両大会の試合記録は本誌30及び32頁参照）

馬場副会長の欧州だより②

活潑な若手養成と偵察活動

ミュンヘンオリンピックの足音が近くに、ごく近くに聞こえるためか、ヨーロッパ各国の「ジュニア」への養成は、驚くべきほどの積極さで進められている。

西ドイツでも、東ドイツでも、ルーマニアも。すべての国がといってよいだろう。

ヨーロッパ諸国で共通しているのはナショナルチームを必ず二つ（A及B）編成し、オリンピックを目標に、自国の強化とあわせて諸外国の偵察にやっきになっている点である。

A（原則として一軍）の老化選手の引退はBの優秀な若手によってすぐに補充されるシステムが確立されている。

偵察活動は、コーチングスタッフが各国際試合をつぶさに見てまわるという常とう手段のほかフィルム撮影などあらゆる方法がとられているようだ。

またAチームは本拠地での迎撃専用、Bチームは遠征して敵情視察といった動きも見せている。

西ドイツ、ルーマニアを破る

さて、いくつかの国際試合の模様をお伝えしよう。

ハイライトはなんといっても12月13、15日ブレーメンとキールで行われた西ドイツ——ルーマニアの2連戦であろう。スコアは

西ドイツ 22（10—12、12—5）17 ルーマニア
西ドイツ 24（13—8、11—10）18 ルーマニア

で西ドイツが地元ファン大歓喜のうちに2連勝した。ルーマニアに連勝したのは5年ぶりのことだという。

第1戦はルーマニアが前半、ガツ、ゴラン、ギネスらの活躍でアヘッドしたが、後半は西ドイツが「シューティング・ルブキング」というニックネームを持つ〝世界のエース〟ルブキングや新人のアーレンドセン、ブシェルがすばらしいシュートを決めて逆転勝ち。

第2戦も西ドイツがルブキングミューラー、ムンク、アーレンドセンらの好技でルーマニアをおさえた。

ルーマニアは期待のグルイアが欠場、コスタケ（弟）の姿も見えなかった。ポペスク、サムンギ、ガツらが主力でGKはペヌとネゴハンの二人がつとめている。

両試合とも七千のスタンドが埋めつくされ、三千の立ち見席も鈴なり。軽く一万人は収容されていただろう。

大観衆の熱気に囲まれ、すばらしいスピードで展開される攻防は、これがハンドボールだ、という感じを強烈にたたきこませる。

審判員はデンマークからオブダル、ヒュウレルの両氏が来独して「複審制」で進められていた。

女子国際審判員も活躍

西ドイツは、11月にはスウェーデンとスイスを迎えて国際試合を行ないスウェーデンには27—22、スイスには10—5、20—10で連勝スイスは7人制ではヨーロッパのBクラスといわれているが、私の見た感じでは日本と比べれば相当差があるようで、ヨーロッパ全般のレベルアップは著しく、これまでの格付で相手を判断することは危険だと思う。

これらの審判も「複審制」でスウェーデン戦はスイス人、スイス戦はフランス人だった。

スイスの審判員は動きもよく立派なジャッジングを示したが、フランスの審判員はおそまつ。日本のレフェリーを標準（100）にすると前者90、後者50点というところだ。

審判といえば11月14日に行われた西ドイツ——デンマークの女子試合は、オランダから招かれた女子審判員で運行された。一人は48才で球歴25年。もう一人は41才で球歴19年、長男もハンドボールの選手で15才ながら1m90もあり、将来が楽しみだったといっていた。服装は男子同ようでもちろん二人ともIHFのライセンスを有しており、厳格なレフリングは定評があるという。

つねに二人のペアで行動しているとかで、「私たちにとって複審制はありがたい」と云っていた。

世界でただ一組の「女子審判員」であろう。

評判のアイスランド

ヨーロッパ球界（男子）で評判となっているのはアイスランドの成長である。

昨春、ルーマニアに16—14で勝って大いに自信をつけたらしい。

西ドイツチームも11月16、17日同国へ遠征して22—21、24—19で勝って来た。選手たちは帰国後『強敵だ』といっていたが、強い。強くなったと聞けばすぐ交流を申しこんで、腕だめしをしてみるヨーロッパ各国の積極さは、いかに地域性とはいえ、日本では考えられない羨しいかぎりだ。

西ドイツ女子、デンマークに勝つ

女子の方も、世界選手権が流れたとはいえ、なかなか活潑である12月14日には、世界選手権で同じ組に入っていたデンマークと西ドイツが対戦している。このグループには日本も加わるハズだったのだから興味深かった。結果は14—10と西ドイツが勝った。

西ドイツはハンブルグ地区の選手が中心で昨秋来日したミュラー、ミルターが加わっており、ミュラーはゲームメーカー、ミルターはゲッターとあいかわらずの役割である。ほかにホイシー、ヤコブ、ゲルターらが目立つ。

日本との比較は難しいが、今夏の田村紡を中心とした全日本チームの合宿での動きを想い出すと日本が優勢だと思う。もっとも西ドイツは11月ルーマニアへ遠征、12—11、9—9のスコアを残している。

この試合はルーマニアが若手中心、西ドイツはすでに名のある選手を送りこんでの対戦だった。

第1戦はキャリアの差で西ドイツが押し切り、第2戦も7—9から西ドイツが挽回、タイムアップ寸前ゲルタがゲットして引き分けに持ちこんだ。

ルーマニアはスタンセル、ボイユアノ、ミクロス、ヘディシュ、フランツといった選手の活躍が目立ったが、特にリーダー格のスタンセル（33才）の巧技と、将来の大器といわれるボイユアノ（一七五センチ）ミクロス（一七九）両選手のスケールの大きいプレーはみごとだった。

女子の場合も新・旧の交替、準備がどの国も万全なのである。

競技人口は二百万

IHFでは、1968年におけるIHF加盟諸国のチーム数、選手数の集計を行ないつつあったが、それをこのたび発表したので、ここに紹介しよう。これによると、チーム数では西ドイツがだんぜん他を圧っし、男子一二、三六一、女子三、二二六、ジュニア一七、四三〇、計三三、〇一七と全世界のチームのほぼ三分の一を占めている。これにつぐのがソ連で合計二〇、三三〇と多く、両国で世界のチームの半数を占めている。

千チーム以上チームをもっているのはブルガリア、デンマーク、東ドイツ、フランス、オランダ、日本、ユーゴー、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、スウェーデン、スイス、スペイン、チェコ、ハンガリーの十七ケ国となっている。

IHF加盟各国のチーム選手数（1968年8月1日）

	チーム			選手数		
	男	女	ジュニア	男	女	ジュニア
エジプト	117	50	90	3,510	1,250	2,500
アルゼンチン	25	—	10	538	—	192
ベルギー	91	—	—	1,523	—	—
ブラジル	9	—	—	165	—	—
ブルガリア	185	63	1,670	2,906	1,070	26,720
デンマーク	1,999	1,161	4,834	23,993	13,932	58,003
西ドイツ	12,361	3,226	17,430	190,000	40,000	200,000
東ドイツ	2,150	1,000	3,500	48,000	15,000	34,000
象牙海岸	13	—	—	260	—	—
フィンランド	61	32	73	975	650	1,645
フランス	1,250	90	1,500	23,750	1,070	18,550
オランダ	648	639	1,614	11,255	10,119	25,757
アイスランド	70	30	100	700	500	1,900
イスラエル	88	38	41	2,000	706	1,640
日本	1,213	435	620	44,382	11,135	18,213
ユーゴー	1,080	512	456	27,490	12,105	8,752
カナダ	40	15	150	500	200	2,000
韓国	44	20	63	748	343	1,071
ルクセンブルグ	19	—	139	250	—	1,465
モロッコ	25	10	30	1,500	150	1,000
ノルウェー	284	400	1,037	3,124	4,400	11,407
オーストリア	245	59	157	4,927	949	3,027
ポーランド	657	202	649	5,988	4,038	10,037
ポルトガル	117	—	72	2,976	—	764
ルーマニア	670	550	980	13,400	11,000	19,600
スウェーデン	2,240	960	615	26,400	9,300	10,500
スイス	1,400	—	980	20,000	—	11,500
セネガル	14	—	11	680	—	540
ソ連	8,580	1,400	10,350	349,000	21,000	420,000
スペイン	562	212	5,640	7,806	2,744	62,603
チェコ	939	381	793	18,788	7,631	15,858
チュニジア	196	10	—	3,992	265	—
ハンガリー	1,225	912	1,520	17,255	14,125	38,500
米国	18	8	4	235	105	46
計	38,635	12,465	55,128	859,016	183,787	1,007,790

競技人口を見ると、ソ連が七九万、西ドイツが四三万とこれまた圧倒的な数をもっている。チーム数の多い諸国はやはり選手数も多くなっている。それにしても、西ドイツ、ソ連両国の選手数はケタはずれて多い。西ドイツは国技となっているし、ソ連では、国がバックアップし、力を入れている。この二ケ国に比べると、現在の世界のトップをゆく諸国、東ドイツ九万七千、ユーゴー四万八千、ルーマニア四万四千、チェコ四万二千、ハンガリー七万と選手数は意外に少ない。これらの選手・チーム数は正規に登録されている数であり、実際はもっともっと多くの人々がハンドボールを競技しているのである。

全世界に一〇万のチーム、二百万の競技人口が正規に登録されていることは喜ばしいことである。

1964年に百六十万といっていた競技人口、九万以下であったチーム数を考えると、かなりの伸長率ということができよう。

これは諸国に普及したのと、すでにハンドボールをやっている諸国での普及がすすんだためであろう。増々競技人口が増大し、諸国へ普及していくことが大いに期待されている。

フランスの技術研究(16)

フリースローを得点源に

訳・藤本　強

前回までは通常の攻撃の場合のフォーメーションについて述べてきたが、今回からは特殊なケースのフォーメーションの例について述べていく。この特殊の場合を利用することによって得点力を倍加させることも可能である。

今回はフリースローについて述べることにしよう。フリースローが直接決められるプレーヤーがいれば、フリースローは7MT同様大きな得点源となるが、今日では守備の壁が確立しているため、直接フリースローはなかなか決めることができなくなっている。今日可能なのは次のような場合であろう。

1、左にたおれこみ、守備の壁の側面をぬく
2、右にたおれ、壁の側面をぬく
3、バックハンドシュートでやはり側面をぬく
4、壁ができきらない間にスキをついて打つ

最初の三つについては、その技術に優れたテクニシャンがいて、フェイントをきかせ、相手のバックをゆさぶってからならば十分可能であろう。

しかし、守備力の向上した今日では、直接フリースローでなく、間接フリースローが行なわれることが多い。

間接フリースローの場合には、フリースロー地点の附近に3人のロングシューターを配し、3人ともゴールに正対してたつのが望ましい。

ボールをもつもののすぐ近くにロングシューターをおく。この時できることなら、右利きを右に、左利きを左側に配するのが望ましい。これはたおれこみシュートを行なう際に有利になる。とにかくフリースローは敵が3M以内に近づけないという利点があるのであるから、それを十分に生かすべきであろう。そのためにはすばやいパスがどうしても必要になるのである。

ボールの近くにたつ3人の選手以外はディフェンスを拡げる意味で、なるべく広く拡がって位置をとる。

いままでのべたのはゴールの前で、そのままシュートできる位置でのフリースローであるが、サイドによった位置のフリースローの場合には、十分に拡がって位置をとるのが良い。

フリースローの場合、相手が3M以内に近づけないのは一つの利点があるが、またもう一つの利点は相手がフリースロー地点に集中し、他がやや手薄になっていることもう一つの利点となろう。これを利用していくのも手である。

このようにして、フリースローが直接でも、間接でもバシバシ決れば、それをおそれて、相手のディフェンスはフリースローをとられないようなやや甘い防禦となりフリースロー以外の得点も大いに増加する。逆にフリースローが決らない場合には、相手のディフェンスはフリースローをとられてもの気持がでて、一寸ぐらい荒くしてもということになり、ますます攻撃は行ないにくくなる。

フリースローを十二分に生かすことはすべての攻撃に有利になってくる。

実際の攻撃の例

例1（第1図参照）

A1とA2はフリースローラインにゴールに向って、正対してたち、A1がボールをもつ。そのやや後にA3（ロングシューターであることが必須条件）が位置している。A1はA3にパスする。A1とA2は壁をブロックするために走りこんでいく。A3はこのA1とA2が作った守備のスキに走りこんでいって、シュートする。もっとも、標準的なフォーメーションであろう。他の右サイドの選手はバックを右に右にひっぱるようにして右に走る。これによって右サイドの守備選手はカバーに動けない。

例2（第2図参照）

ギョッピンゲン（FA、ギョッピンゲン）、壁が二人の場合に使われる。A2とA3はフリースローラインに並ぶ。A2はA1にパスをする。A2とA3は壁の両側に走りこむ。ディフェンスがつかないほうにパスをする。A2、A3にディフェンスが動いた場合にはA1がシュートする。

例3（3図参照）

1同様の配置をとる。A1はA4にパスし、A2とともに壁のブロックに入る。A4は中央に向って走りこみ、D4をひきよせる。D4のぬけたスキにA3が走りこみ、A4からバックハンドパスをされたボールをとって、シュートする。D5がA3に向って、スタートしたならば、A4はA5にパスする。A3からA5にパスすることもあり得る。

例4（第4図参照）

A1はゴールに正対し、ボールをもってたつ。両脇に肩をよせあってゴールに背を向けたA2、A3が位置する。A2は右利き、A3は左利きかもしくはバックハンドシュートの達人であることが必要である。

A1はA2もしくはA3にバックの動きをみながら、パスを送るA2、A3は側面へのたおれこみシュートを行なう。バックが左右にわれる動きをするときは、A2A3が左右にフェイントをかけた後、A1が直接シュートを行なうようにする。シューターさえ得られれば、かんたんなだけにきわめめて有効なフォーメーションであ

る。このフォーメーションの成否は3人のシュート能力と、ボールをもつA1の判断にかかってこよう。

例5（5図参照）

例1、例3と酷似しているフォーメーションである。位置は1、3と同様、1と同様にパスはA3にでる。A3はボールをもったまま中央に入りこむ。D4をつれだしたところでA4にパス。A4はできたらシュート、できない時には、D5がついている筈であるから、ノーマークのA5にパス。もちろんA3はノーマークならば1のフォーメーション通りにシュートする。壁をA1とA2でブロックするところに、攻撃側が余る理由が生れる。

例6（6図参照）

形としては、1、3、5と良く似た位置をとる。A1はA2にパスを入れ、ブロックに行く。A2はパスをもらい、シュートフェイントを行ない、D1をつり出し、そのスキに入ったA3にパスをする。他のバックはそれぞれひきつけられ、あるいはブロックされている。A3がうてなければ、右に右にボールを廻せば、ノーマークが生れる。

フリースローからのフォーメーションもスタートが違うだけで、あとは一般のフォーメーションの原理と同様、とっさのパスのコースとブロック、このタイミングの問題に環元することができよう。

フリースローを重要な得点源にできるように練習する必要がある。

1

2

3

4

5

6

ハンドボールの歩み（第8回）

チェコの初優勝

―世界選手権編⑧―

　第6回世界選手権大会の本大会は１９６７年１月12日から21日までの10日間スウェーデンで行なわれた。この大会、申しこみ国は26ケ国（内エジプトが棄権）となり10ケ国が予選でふるいおとされることになった。予選なしで直接本大会に出場できるのは規定により前回優勝のルーマニア、開催国スウェーデン、アジア代表日本の三ケ国とエジプトの棄権により、アフリカ代表になったチュニジアの四ケ国であった。

　予選はすべて二回戦方式で行なわれた。

▽予選リーグA組

チェコ　35－15　オーストリー
チェコ　22－19　オーストリー
オーストリー　17－12　ノルウェー
ルウェー　24－12　オーストリー
チェコ　8－5　ノルウェー
チェコ　22－20　ノルウェー

①チエコ②ノルウェー③オーストリア

▽同B組

スイス　36－19　ベルギー
スイス　31－14　ベルギー
西ドイツ　26－6　ベルギー
西ドイツ　38－18　ベルギー
スイス　13－8　オランダ
スイス　14－8　オランダ
オランダ　19－14　ベルギー
オランダ　21－15　ベルギー
西ドイツ　14－13　スイス
西ドイツ　30－15　スイス
西ドイツ　18－7　オランダ
西ドイツ　18－13　オランダ

①西ドイツ②スイス③オランダ④ベルギー

▽同C組

東ドイツ　26－16　フィンランド
東ドイツ　27－9　フィンランド
ソ　連　26－11　フィンランド
ソ　連　24－15　フィンランド
東ドイツ　24－16　ソ　連
ソ　連　17－13　東ドイツ

①東ドイツ②ソ連③フィンランド

▽同D組

デンマーク　22－16　ポーランド
ポーランド　18－14　デンマーク
ポーランド　27－19　アイスランド
アイスランド　23－21　ポーランド
デンマーク　17－12　アイスランド
デンマーク　23－20　アイスランド

①デンマーク②ポーランド③アイスランド

▽同E組

ハンガリー　24－15　スペイン
ハンガリー　26－17　スペイン
フランス　14－14　スペイン
フランス　22－12　スペイン
ハンガリー　10－10　フランス
ハンガリー　31－17　フランス

①ハンガリー②フランス③スペイン

▽アメリカゾーン

合衆国　26－24　カナダ
カナダ　30－17　合衆国

①カナダ②合衆国

▽地中海ゾーン

ユーゴ　23－11　イスラエル
ユーゴ　19－11　イスラエル

①ユーゴ②イスラエル

　以上の結果、本大会は、A組ユーゴ、スウェーデン、ポーランド、スイス、B組西ドイツ、ハンガリー、日本、ノルウェー、C組ルーマニア、ソ連、東ドイツ、カナダ、D組チェコ、デンマーク、フランス、チュニジアの各組に分けられリーグ戦が組まれた。

▽本大会第一次リーグA組

スウェーデン　26－16　ポーランド
ユーゴ　26－11　スイス
スウェーデン　19－16　スイス
ユーゴ　22－17　ポーランド
ユーゴ　21－17　スウェーデン
ポーランド　20－18　スイス

①ユーゴ3勝②スウェーデン2勝1敗③ポーランド1勝2敗④スイ

ス3敗

▽同B組

西ドイツ 22－16 ノルウェー
ハンガリー 30－25 日本
ハンガリー 15－11 ノルウェー
西ドイツ 38－27 日本
西ドイツ 29－23 ハンガリー
日本 21－17 ノルウェー

①西ドイツ3勝②ハンガリ2ー勝1敗③日本1勝2敗④ノルウェー3敗

この結果、日本はまたノルウェーに1勝し、西ドイツ、ハンガリーとも善戦したが、守備陣の差がいかんともならず、決勝トーナメントに進出することはできなかった。

▽同C組

ルーマニア 14（分）14 東ドイツ
ソ連 28－8 カナダ
ソ連 22－17 東ドイツ
ルーマニア 27－3 カナダ
ルーマニア 15－13 ソ連
東ドイツ 37－6 カナダ

①ルーマニア2勝1分②ソ連2勝1敗③東ドイツ1勝1敗1分④カナダ3敗

最大の激戦区、C組では、東ドイツが涙を飲む結果となった。東ドイツは世界選手権ではとかく実力をもちながら悲運がつきまとっているようである。

▽同D組

チェコ 25－10 フランス
デンマーク 27－6 チュニジア
デンマーク 9－8 フランス
チェコ 23－10 チュニジア
チェコ 24－14 デンマーク
フランス 16－7 チュニジア

①チェコ3勝②デンマーク2勝1敗③フランス1勝2敗④チュニジア3敗

各組の1・2位8チームによってトーナメントが行なわれることになり、決勝ラウンドは進んだ。

▽準々決勝

ソ連 19（10－7、9－9）16 西ドイツ
チェコ 18（9－3、9－8）11 スウェーデン
デンマーク 14（6－5、8－8）13 ユーゴー
ルーマニア 20（13－12、7－7）19 ハンガリー

東ドイツの敗退を除けば順当にきた予選リーグも準々決勝では大きく予想と変ってきた。西ドイツが破れ、ユーゴーが破れ、ルーマニアがハンガリーに苦しむといった予想外のことがおこった。

▽5－8位決定一回戦

スウェーデン 21（10－11、11－8）19 ハンガリー
西ドイツ 31（14－12、10－12：1－1、2－2：3－1、1－2）30 ユーゴー

第二延長にもつれこむ大試合、16本の7MTがとびかう大熱戦。

▽準決勝

デンマーク 17（9－8、8－4）11 ソ連

デンマークのGKホルストを主体とした守りの勝利。予想外のできごと。

チェコ 19（11－10、8－7）17 ルーマニア

スタートからとびだして、そのまま追いつかれてからもつきはなしたチェコの勝利

▽1位決定戦

チェコ 14（8－8、6－3）11 デンマーク

デンマークの善戦があったが順当なチェコの勝ち、予選リーグでの10点差をここまでつめたデンマークのゴールキーパーホルストをはじめとした善戦がたたえられた

▽3位決定戦

ルーマニア 21（8－11、10－7：3－1）19 ソ連

延長戦の末、ルーマニアの3位が決定

チェコチーム

▽5位決定戦

スウェーデン 24（12－12、12－10）22 西ドイツ

前半の優位を生かしたスウェーデンの勝利

▽7位決定戦

ユーゴー 24（9－9、15－11）20 ハンガリー

の結果となり、デンマークが結果的に2位となった以外は、東欧圏の諸国が順当に上位を占め、ハンドボールは東欧圏のものであることをはっきりとしめした。

〔優勝メンバー〕

GK アルノスト、スカルバン
FP グレゴール、マレシュ、フロロ、ベネス、シンナー、デュダ、ブルナ、コネクニー、ハブリク

× × ×

7人制ハンドボールの世界選手権の歴史はこの8回をもって終りとなりますが、次回は7人制の歩みを追うことと11人制の世界選手権の歴史をながめることとします。そのあとヨーロッパカップの歴史を見ていくつもりにしています。

（藤本）

男女とも中京大A優勝

◇第9回愛知学生トーナメント

▽男子1回戦勝者　名城大A、B　愛知大、名古屋学院大、中部工大A、中京大B、南山大B

▽同2回戦勝者　中京大A、B、D、名大A、B　愛知大、愛知教大A、名城大A

▽同準々決勝

愛知教大A　18－10　中京大B
中京大D　19－17　名城大A
名大A　31－11　愛知大
中京大A　23－12　名大B

▽同準決勝

中京大D　－　愛知教大A
中京大A　－　名大A

▽同決勝

中京大A　31（18－6／13－10）16　中京大D

▽女子1回戦（＝準決勝）

中京女大A　12－5　中京大B
中京大A　32－2　中京女大B

▽同決勝

中京大A　10（7－5／3－3）8　中京女大A

西南学院が全勝優勝

◇第2回福岡県学生秋季リーグ

福岡大　17－14　福岡工大
九州大　34－8　福岡教大
九州産業大　29－13　福岡大
西南学院　23－11　東海大
西南学院　16－12　九州大
福岡教大　17－6　東海大
九州産業大　18－16　九州大
西南学院　22－12　福岡大
福岡工大　22－12　東海大
西南学院　17－15　九州産業大
福岡大　15－10　福岡教大
九州大　32－16　福岡工大
九州産業大　32－21　東海大
九州大　19－16　福岡大
福岡工大　12－10　福岡教大
九州大　18－12　東海大
九州産業大　32－15　福岡工大
西南学院　17－11　福岡教大
福岡大　20－8　東海大
九州産業大　28－6　福岡教大
西南学院　20－6　福岡工大

【順位】①西南学院6戦全勝②九州産業大5勝1敗③九州大4勝2敗④福岡大⑤福岡工大⑥福岡教大⑦東海大

関西学生秋季リーグ評・松本秀夫

〔記録のみ前号既報〕10月22日大阪中央体育館で幕をあけた関西学生秋季リーグは初の4部制（1～3部各6校、4部5校）と新発足の女子2校を加え全58試合を行った。

その結果1部は関西大、同志社大が全勝同士で対戦、同点のまま勝負がつかず、改めて優勝決定戦（史上3度目）を行うという激戦の末関西大が2シーズンぶり通算4度目の優勝を飾った。

×　　×　　×

▽1部　王座への出場権をかけ春秋連続優勝を狙う同志社と、春の雪じょくを期す関西大、念願の1部入りを果たした大体大と、近来まれにみる充実したリーグ戦だった。まず2日目までに関学が大経大、関大にともに1点差で敗れ優勝争いから後退。関西大は宮永の欠場で苦しい試合をつづけたが、馬着、松田らの活躍で勝ちこんだ。

優勝候補同志社は、中井・舟木のシュート力はさすがだったが攻守に春ほどの元気がなく、試合ごとに調子を落としていく感じで戦前の予想をうら切る出来であった。

ともに苦戦をつづけながら無キズのまま最終日に対決した関西大－同志社戦は、関大が宮永の出場とGK西口の堅守にささえられみちがえるばかりの試合ぶりを示し前半の4点差を粘ってばん回、引き分けにもちこんだ。

昭和34年春の関学・同大・関大三すくみ以来9年ぶり史上3度目の優勝決定戦はリーグ戦同よう同志社が終始主導権を握って試合を進めたが、関西大は、残り3分で同点に追いつき、終了30秒前に松田のシュートで決勝点をあげ、あざやかな逆転勝ちをとげ劇的な優勝を飾った。チームワークの勝利であり、粘りの勝利である。

期待どおりの活躍で3位に入った桃山学院大は3年生以下とは思えない試合ぶりで、特に三国の巧みなシュート、土田の力強いプレーは来季への期待を高めた。

4位の大阪経大は桐の強引なシュートと脇田、清水が頑ばったがチーム全体のまとまりにかけB級に終った。

5位という不本意な成績に終った関学は、序盤で大経大、関大に惜敗したのが痛かった。

大体大は決め手に欠けた。最後まで全力で斗う気力は見習うべきものがある。

▽2部・復帰を狙う甲南大、大阪大、京大の三つどもえとなったがGK和田の活躍と速攻にものをいわせた甲南大が全勝で首位。

▽3・4部・大阪外語大と大歯大の争いとなったが、外大は小林の巧いプレーで押し切った。入れ替え戦でも勝ち来季から2部で活躍することになった。4部は京都教大が全員よく走り他校を圧倒した。

（関西学連委員長）

得点10傑（本誌調べ）

順位	氏名	所属	得点
①	桐	（大経大）	42
②	中井	（同志社）	33
③	西野	（関　学）	25
③	三国	（桃山学）	25
⑤	土田	（桃山学）	24
⑥	馬着	（関西大）	22
⑦	西脇	（関西大）	20
⑦	松浦	（同志社）	20
⑦	舟木	（同志社）	20
⑩	許	（関西大）	19
⑩	中野	（同志社）	19
⑩	植田	（大体大）	19

▼優勝決定戦（11月15日、大阪府立体育会館）

関西大　12（5－7／7－4）11　同志社大

得	【関大】		【同大】	得
0	西口	GK	和保	0
0	伊藤	FP	松浦	2
2	馬着	FP	舟木	1
1	長野	FP	町田	2
2	西脇	FP	中井	2
5	松田	FP	阪野	2
2	宮永	FP	中野	2
0	許	FP	大羽	0
0	飼沼	FP	光田	0
0	宮松	FP	富田	0
12（3）		7MT		（0）11

（主審　山本）

神奈川学連結成へ

関東学連所属で神奈川県下に籍をおく防衛大、関東学院、横浜商科大、東海大の4校は神奈川協会の協力を得て「神奈川学連」の結成を準備することになった。年1～2回の県学生選手権を開きたい意向。

なお、県内に練習場をもつ法政（川崎市）、慶応（横浜市）＝いずれも東京協会＝にも加盟を呼びかける予定である。

大阪外語大、2部入り

◇関西学生秋季リーグ戦入れ替え戦（1、2部は前号既報）

▽2・3部

大阪外語大（3部）　20－11　大阪府立大（2部）

外語大は加盟5シーズン目で2部昇格。大府大の転落は初。

▽3・4部

京都教大（4部）　14－13　大阪工大（3部）

その成果が注目されていた二つの大会が昨年くれ名古屋と横須賀で開かれた。

名古屋で行われたのは、最高強者を選ぶ新しい〝県選手権方式〟と話題をよんだ「愛知リーグ」。横須賀で行われたのは「関東地区自衛隊選手権」。

ともに日本リーグ、全国自衛隊大会にさきがけて、地方関係者の情熱によって今年からスタートしたものである。

中京クが王座に　愛知リーグ

第1回愛知リーグは昨年11月25日から29日までの5日間名古屋の金山体育館に、県内3加盟団体から推せんされたそれぞれ2チーム計6チームによって行われた。

その結果、クラブ連盟代表の中京クと桜丘会が堅実な試合運びで勝ち星をあげ、両者の対決は引き分けとなって4勝1分の同率で並び、得失点差で上廻った中京クが初の王座についた。（ク①はクラブリーグ1位を表す学は学生選手権、実は実業団リーグ）

中京ク（ク①）16（9−4、7−7）11 名城大（学②）
桜丘会（ク②）28（14−4、14−12）16 トヨタ車体（実②）
富士製鉄（実①）14（5−4、9−10）14 中京大（学①）　引き分け
中京大 14（10−7、4−7）14 名城大　引き分け
中京ク 32（15−1、17−4）5 トヨタ車体
桜丘会 21（9−7、12−7）14 富士製鉄
桜丘会 24（10−4、14−10）14 名城大
富士製鉄 21（9−4、12−4）8 トヨタ車体
中京ク 21（11−5、10−7）12 中京大
富士製鉄 13（4−5、9−7）12 名城大
中京大 20（9−2、11−2）4 トヨタ車体
中京ク 15（10−6、5−9）15 桜丘会　引き分け
桜丘会 18（8−7、10−8）15 中京大
名城大 21（9−3、12−3）6 トヨタ車体
中京ク 21（11−6、10−8）14 富士製鉄

【順位】①中京ク4勝1分（得一〇五、失五七）②桜丘会4勝1分（得一〇六、失七四）③富士製鉄名古屋2勝2敗1分④中京大1勝2敗2分⑤名城大1勝3敗1分⑥トヨタ車体5敗

○…一般女子のブラザー工業を除いて国体に出場すら出来なかった愛知。最古の歴史を持つ実連と、全国に先がけて結成され大成功を収めているクラブ連盟など運営面では最先端をゆく愛知。この矛盾を解決し強化の第一歩とすべき大会がこの愛知リーグである。クラブ王国愛知において又もやその牙城を揺がすことは出来なかった。中京クは対桜丘会戦の後半パスワークに乱れを生じ追いつかれ完全優勝を逃がしたが他チームとの対戦では圧倒的に強みを示した。実連期待の富士鉄はあいかわらずパスミスが多くそれが肝心なところで出て中京大にも追いつかれ引分けた。名城大はこのリーグ尻上りに調子を上げ東海学連に中京・名城の二強時代の幕明けを告げているようだった。概して大成功に終った愛知リーグだったが短期リーグのため疲労の問題、対戦相手のための練習が出来なかった事など将来はやはり長期リーグにしたいと思う。そしていつかは再びハンドボール王国の栄光を取り戻すことを期待する。（**田中滋章・愛知協会常務理事**）

勝田施設学校が優勝

第1回関東地区自衛隊選手権は昨年11月30、12月1日の両日、神奈川県横須賀・防衛大競技場に15チームが参加して行われた。

大会は実績のある勝田施設学校（茨城）と防衛大A（神奈川・関東学連）の2チームをシードし、残る13チームを4組に分けて予選を行い、勝者4チームとシード両者によって決勝トーナメントが争われた。その結果、予想通り勝田施設学校と防衛大Aが勝ち残り、速攻とポストプレーにまさる勝田施設学校が快勝、初優勝を遂げた。

▽予選A組
久里浜通信学校B 16−10 少年工科校
宇都宮教育航空群 31−6 少年工科校
宇都宮教育航空群 20−7 久里浜通信学校B

▽同B組
体育学校 18−10 横須賀地区病院教育部
横須賀地区病院教育部 22−16 富士学校
体育学校 24−10 富士学校

▽同C組トーナメント
海上自衛隊第四航空群 25−11 横須賀教育隊
久里浜通信学校A 18−5 少年工科校職員
久里浜通信学校A 22−12 海上自衛隊第四航空群

▽同D組
防衛大B 16−6 海上自衛隊第二術科校
海上自衛隊補給処理所 21−16 海上自衛隊第二術科校
衛防大B 25−8 海上自衛隊補給処理所

▽決勝トーナメント1回戦
体育学校 15（6−4、9−9）13 宇都宮教育航空群
防衛大B 25（13−9、12−8）17 久里浜通信学校A

▽同2回戦（＝準決勝）
防衛大A 16（8−7、8−6）13 体育学校
勝田施設校 19（8−4、11−5）9 防衛大B

▽同決勝
勝田施設学校 22（9−4、13−6）10 防衛大A

○……自衛隊ハンドボール大会は過去三回朝霞市ケ谷で開かれているが、数年前いつとはなしに消えてしまった自衛隊にハンドボールが取り入れられたのは昭和二十八年に体育指導者コースの教材として採択されてから以後と聞いている。それ以来第十回国体での競技見学。三十年には陸自通信学校体育班（体育学校の前身）チームが出来て神奈川県協会にその姿をあらわしたのが最初と思う。

○……日本協会、朝雲新聞社（自衛隊機関紙）の後援で関東地区ながら選手権大会が持たれたことは喜ばしい限りである。いままで横須賀市で行われた海自航空教育隊関係の全国大会を始めとし各地区での親睦試合、はたまた本大会に部隊で予選を経て出場選手の決定をみたチームもあると云う普及段階の今日、この大会を契機に柔剣道、ラグビーサッカーと同様毎年自衛隊全国大会がぜひ実現する様協会が自衛隊ハンドボール関係者と共に積極的に乗り出し防衛庁を始めとする各関係方面に働きかけてその実現に邁進されることを強く望んでやまない（**三浦公・神奈川協会理事**）

各地の記録

明善、圧倒の15連勝

▼第15回福岡県室内選手権（12月 小倉体育館）

▽高校男子準々決勝
小倉工 16—8 築紫中央
八幡工 10—9 宗像
若松 13—10 博多工
小倉西 16—10 門司

▽同準決勝
小倉工 10—8 八幡工
若松 9—8 小倉西

▽同決勝
若松 9（4—2 5—2）4 小倉工
若松高は2年ぶり3度目の優勝

▽同女子準々決勝
古賀 8—6 筑紫中央
筑紫女学園 16—2 南筑
室見丘 16—10 信愛学院
明善 10—2 福岡女

▽同準決勝
筑紫女学園 8—4 古賀
明善 棄権 室見丘

▽同決勝
明善 10（3—1 7—1）2 筑紫女学園
明善高は15年連続優勝

▽一般男子準々決勝
博多工OB 22—10 宗像ク
若松ク 24—11 福岡電波ク
北筑ク 32—17 北九州教員
西南ク 26—19 東海大

▽同準決勝
博多工OB 15—13 若松ク
西南ク 23—15 北筑ク

▽同決勝
博多工OB 16（8—8 8—6）14 西南ク

生駒、十津川に辛勝

▼奈良県高校総合体育大会ハンドボール（畝傍高）

▽男子準々決勝
奈良B 22—13 畝傍
生駒 20—5 桜井商B
添上B 21—7 十津川
添上A 17—12 桜井商A

▽同準決勝
添上A 17—4 奈良B
添上B 11—10 生駒

▽同決勝
添上A 19（13—6 6—10）16 添上B

▽女子準決勝リーグA組
生駒A 19—1 桜井商
桜井商 4（分）4 郡山
生駒A 25—2 郡山

▽同B組
十津川 20—1 生駒B
添上 8—6 生駒B
十津川 12—5 添上

▽同決勝
生駒 10（3—4 4—3 1…1 1…1 2—0）8 十津川

全新居浜工、住化降す

▼愛媛県総合選手権（1月・今治西高）

▽男子準々決勝
住友化菊本 23—6 今治西高
今治工OB（A） 不戦勝 松山工OB
寿電機 21—16 今治南高
全新居浜工 33—11 今治工OB（B）

▽同準決勝
住友化菊本 27—11 今治工OB（A）
全新居浜工 34—13 寿電機

▽同決勝
全新居浜工 18（7—4 11—6）10 住友化学菊本

▽女子決勝（参加2チーム）
今治南高 15（8—1 7—1）2 今治西高

男女とも高校が優勝

▼和歌山県秋季選手権（11月、那賀高）

▽男子準々決勝
和商ク 16—10 和歌山大
那賀高 16—8 和歌山高専
丸善石油 17—13 御坊商工B
桐蔭高 9—6 住友金属

▽同準決勝
那賀高 18—15 和商ク
丸善石油 24—11 桐蔭高

▽同決勝
那賀高 19（11—5 8—7）12 丸善石油

▽女子1回戦（2試合）
貴和高 8—4 御坊商工
粉河高 14—6 和商ク

▽同準決勝
貴和高 6—4 県和歌山商
粉河高 20—6 御坊ク

▽同決勝
粉河高 7（4—2 3—4）6 貴和高

清水勢、ゆるがず

▼静岡県総合選手権（11月、草薙体育館）

▽男子準々決勝
清水商高 33—7 清水橘クB
清見潟ク 31—13 富士ク
沼津ク 19—9 天竜林ク
清商ク 20—13 静農ク

▽同準決勝
清見潟ク 10—8 清水商高
清商ク 20—13 沼津ク

▽同決勝
清商ク 12（6—2 6—5）7 清見潟ク

▽女子準々決勝
清水女高ク 7—4 静岡城北ク
暁野ク 12—4 浜南ク
静岡城北高 12—4 二俣ク
清商ク 不戦勝 全吉原

▽同準決勝
清水女高ク 8—3 暁野ク
清商ク 6—3 静岡城北高

▽同決勝
清商ク 11（6—0 5—3）3 清水女高

星友会と精華女高勝つ

▼第11回京都府総合選手権（11月 京都）

▽男子準々決勝
伏見クB 12—11 嵯峨野ク
洛東ク 13—7 伏見工高
伏見クA 21—9 京都市役所
星友会 25—18 京都信用金庫

▽同準決勝
洛東ク 15—13 伏見クB
星友会 10—9 伏見クA

▽同決勝
星友会 13（7—5 6—7）12 洛東ク

▽女子準々決勝
精華女高 14—7 乙訓高
塔南高 5—3 京都女OG
精華女OG 23—6 洛東高
明徳商高 13—2 京都女高

▽同準決勝
精華女高 9—4 塔南高
明徳商高 14—6 精華女OG

▽同決勝
精華女高 17（7—3 10—3）6 明徳商高

女子で真備が圧勝

▼岡山県高校秋季選手権大会（11月、玉野高）

▽男子準々決勝
倉敷商 10—5 津山
津山工 12—6 児島
操山 9—6 天城
矢掛 17—12 玉野

▽同準決勝
倉敷商 17—6 津山工
矢掛 13—3 操山

▽同決勝
倉敷商 13（7—3 6—8）11 矢掛

▽女子準々決勝
真備 19—5 落合
井原 23—3 金川
西大寺 8—6 津山商

青陵　不戦勝　津山

▽同準決勝

真備　12―3　井原

青陵　8―7　西大寺

▽同決勝

真備　16（9―0 7―1）1　青陵

クラブ勢で決勝戦

▼第9回山口県総合室内一般男子選手権＝山口協会創立20周年記念大会（12月、山口県立体育館）

▽男子準々決勝

外郎ク　23―14　日本ゼオン

武田薬品光　27―16　山口教育団

出光徳山　15―12　徳山ク

下関ク　13―9　宇部高専

▽同準決勝

外郎ク　26―20　武田薬品光

下関ク　15（分）15　出光徳山

抽せんで下関クの勝ち

▽同決勝

下関ク　24（12―8 12―12）20　外郎ク

着実な石岡一、八郷

▼茨城県高校新人戦（11〜12月、男＝竜ケ崎一高、女＝鉾田二高）

▽男子準々決勝

石岡一　10―5　土浦工

茨城　19―16　水海道一

笠間　13―6　竜ケ崎一

麻生　17―12　勝田

▽同準決勝

石岡一　16―9　茨城

笠間　13―6　麻生

▽同決勝

石岡一　13（7―3 6―7）10　笠間

▽女子準々決勝

麻生　5（分）5　常北

水海道二　10―8　笠間

八郷　9―3　石岡二

鉾田二　10―7　日立二

▽同準決勝

麻生　11―6　水海道二

八郷　11―1　鉾田二

▽同決勝

八郷　18（9―0 9―3）3　麻生

▽茨城県中学新人戦男子リーグ順位①新治②千代田③麻生④波崎二

▽同女子トーナメント決勝

水海道　5―4　水海道

鹿本高教員優勝

▼第9回熊本県教職員大会（12月済々黌）＝男子のみ

▽高校教職員の部準々決勝

菊池農教　13―7　玉名農教

荒尾高教　18―5　熊本一高教

鹿本商工教　13―5　玉名好高教

鹿本高教　11―7　水俣高教

▽同準決勝

菊池農教　16―13　荒尾高教

鹿本高教　7―4　鹿本商工教

▽同決勝

鹿本高教　19（9―7 10―10）17　菊池農教

▽小・中学校教職員の部1回戦

牛深中教　16―5　帯山中教

大津中教　11―4　姫戸小教

▽同準決勝

白川中教　10―5　牛深中教

大津中教　6―4　下益城西部中教

▽同決勝

白川中教　16（8―5 8―5）10　大津中教

高松ク、延長で勝つ

▼香川県総合選手権（11月・高松工）

▽男子準決勝

三本松OB　18―14　香川教員

高松ク　15―12　常盤ク

▽同決勝

高松ク　19（9―7 7―9 … 1―0 2―1）17　三本松OB

▽女子準決勝

観音寺商高　8―6　香川高

三本松高　不戦勝

▽同決勝

三本松高　15（4―1 11―2）3　観音寺商

菊池農高を推せん

日本スポーツ賞部門表彰

日本協会は「第18回スポーツ賞ハンドボール部門賞」（読売新聞社制定）の今年度推せんチームとして菊池農高女子チーム（熊本）を決めた。同校は初受賞。高校女子が推せんされたのは寝屋川高（昭29）、徳山高（昭38）につづき3度目。

山口協会が20周年

山口協会では、このほど創立20周年を迎え、12月8日山口市の山口県立体育館で記念式などを行い発展、育成に功績のあった18氏などを表彰した。功労賞を授与されたのは次のみなさん。（ABC順敬称略）写真は記念式の時のもの

青木操、荒瀬一生、藤田信義、星井直、片山彰一、室谷六郎、槇敏夫、光永教之、野村正、岡村久尾川謙輔、桜井直養、富樫栄、田辺恵美子、常田隆、田原正美、柳井文治、横瀬正寿

安藤氏ルーマニアで主審担当

訪欧中の安藤純光氏（法大出・日本協会常務理事）は、このほどクルージュで行われたルーマニア国内リーグで主審を担当し好評をはくした。安藤氏が日本協会審判部長ということで、ゴールジャッヂはルーマニア審判長のシデア氏とハンガリーの国際審判員ケスリィ氏がつとめるという豪華なスタッフが組まれた。

編集後記

新年おめでとうございます。遅ればせながら。

馬場副会長の頼りにもあるようにヨーロッパ諸国のミュンヘンへの始動は相当なものがあります我国でも、第一次候補選手が決定し、本誌が手元に届くころには、第一次合宿もおわり、強化活動が本格化しているものと思われます。

昨年は女子世界選手権をめぐって種々のことがおこりました。本年は万事無事に快調に進むように望んでいます。

今号は選抜大会を特集しました各チームのレベルが近くなってきて、白熱した試合が展開されたのはきわめて有意義なことでした。

中学校体育にもとりあげられるようになり、発展の基礎はできました。あとは努力するだけです。がんばっていきましょう（TF）